

ぶどうの木

第 36 号 (2011 年 5 月発行)

「ぶどうの木」第三六号

目次

巻頭言

特集 受洗五十年を顧みて

あかし

基督伝道隊 戸畑教会の歩み

榎本和義牧師

1

献身修養生活を顧みて

限上望都

35

感謝

高速の時代の流れの中で

廣田壽

55

榎本和義牧師

4

乳がん記

井田れい子

57

正野眞宏

9

神様の主権のもとで

長田正幸

60

尼田隆己

12

主の備えし道に歩みて

間二葉

64

正野隆士

15

主よ、御心のままに

石田秀子

68

正野悠子

19

信仰雑感(三)

門司澄子

71

河本米子

22

長女の受験の思い出

首藤正

73

正野百合子

24

若い人たちへの勧め

下川泰廣

76

下川薫子

25

編集後記

榎本和義牧師

79

榎本和義牧師

28

伊規須太郎

伊規須太郎

32

伊規須太郎

32

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

基督伝道隊

巻頭言

榎本和義 牧師

二〇一一年三月十一日午後三時すぎ、東北関東沖大地震が発生し、それに伴う巨大津波に襲われて、東北地方から関東地方にかけて、太平洋岸沿いに多数の市町村が壊滅的な被害をこうむりました。死傷者の数もまだ把握されていない状況が続いています。新聞、テレビなどのニュースメディアは休みなく、惨状を伝えていきます。さらに、自然災害に加え、原子力発電所の損傷による危機的状況も伝えられています。

このような事態は初めて体験することですから、ニュースを聞いたり、見たりすると、不安は募り、心配が湧いてきます。一方、なにも出来ない虚脱感と先が見通せない焦りを感じますが、まさにこのようなときこそ、主のみことばに立つほかありません。

「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」(マタイ二四・三五)

どのような事態になろうとも、神様のご愛を信じて、「みことばのままに」と委ねることができるからです。

思いがけない状況のなかで、証集「ぶどうの木」三六号を発行することになりました。これも神様の深い摂理によるものと信じます。集められた「あかし」はまさに覆いかぶさってくる絶望の暗闇に光を灯すものばかりです。一つ一つの「あかし」を通して、

「見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるか」(エレミヤ三二・一二七)

との御声が響いてきます。目の前にある現実の事象とその背後にある神様のみ思いをしっかりと受け止めたいと思います。

殊に、今回は受洗五十年を迎える方々にその恵みを語っていただきました。考えると、よくもまあこんなに長い年月を、と思われませんが、それこそ神業(かみわざ)です。自分の力や努力によるものはなにひとつありません。共に感謝し喜びましょう。さらに毎年五十周年を迎える方々が続けてくださることを願っています。

「しかし、イエスはお許しにならないで、彼に言われた、『あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい』」(マルコ五・十九)

悪霊につかれた人が癒され、喜びのあまり、主にお供して

行こうとしたとき、イエス様が語った言葉です。これは救いを受けた私たちに主が願っておられることでもあります。次回にはぜひあなたも主の恵みを語ってください。

原稿を寄せてくださった方々、面倒な編集をしてくださった方々、皆さん、ありがとうございます。読んでくださる方々のうえに、主の豊かな恵みと祝福を祈ります。



特集 受洗五十年を顧みて

私達が受洗の恵みに与ったのは、昭和三六年四月三日(月)早朝、場所は紫川上流でした。受洗者は八人、当時の写真を尼田兄が複製してくれました。前列右から正野隆士兄(現岡山岡南教会)、正野真宏兄(八幡前田教会)、伊規須富夫兄(故人)、榎本和義兄(現牧師)、尼田隆己兄(八幡前田教会)、小野道子姉(連絡先不明)、調(現正野)悠子姉(福岡大濠公園教会)、永谷悦子姉(当時折尾女子商業学生、故人)です。

(写真には、榎本利三郎先生ご夫妻はじめ大野季太郎兄など懐かしいお顔が見えます。)

あれから、今年で五十年を迎えました。時の速さを思わされます。この五十年の間に、日本の国も大きく変わりました。当時、まだ若かったそれぞれが、時代の流れにもまれながら、それぞれの人生を歩み、神様の取り扱いを受けて今日に至りました。すでに天に召された方もおられます。そして、大部分の方が与えられた信仰を守り通し、今日に至ったことは主の恵みであり、どんなに感謝してよいか分りません。すでに六十代後半から七十代に入り、人生の終章を迎えて、当時を



思い起こし、来し方を顧み、「あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ」（イザヤ五一・一）、主の恵みを記念することは有意義な事と思ひ、皆さんに投稿をお願いしました。

併せて、受洗した教会は異なりますが、同じ年に受洗された河本米子姉、正野百合子姉、また私達よりも一年前に受洗され、昨年五十年を迎えられた下川薫子姉も、感謝の一文を寄せて頂きました。



榎本和義 牧師

わたしの信仰遍歴

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。」（エペソ二・八）

今年で受洗五十周年になるとのこと、もうそんなになつたのかと感慨深いものがあります。受洗当時のことを振り返ってみると、どれほどの信仰があつただらうかと心許ない次第です。

当時、私は高校三年を終わり、卒業したときです。その年の初めに入学試験に臨み、その結果、受験したところは全て不合格となりました。現役生のとき、勉強らしいこともしないで、身の程も知らず、明らかに高望みと思われる受験でしたが、落胆のしかたは人に負けないほどでした。今、考えてみると、入試に失敗したことが良かったしみじみ思われます。まさに神様の憐みであつたのです。このことを通して、高慢で、見栄っ張りで実行の伴わない自分が砕かれたのですから。それをきっかけに受洗を願うよ

うになりました。しかし、それでもなお、明確な死とよみがえりの確信はなく、もつと表面的なご利益信仰であつたと思います。ただ、このままでは勉強も手につかず、信仰生活も中途半端で受験浪人となつては、同じ失敗を繰り返すことが明白でしたから、なんとか心機一転、自分を変えなければと思ひました。そのようなとき、与えられた御言がヨハネによる福音書三章五節「イエスは答えられた、『よくよくあなたに言つておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。』」でした。

その当時、この御言のメッセージをどれほど深く悟つていただろうかと思うと、まことに赤面の至りです。それでも神様の方が信仰を持って、期待してくださいだったので、受洗のための個人伝道を通して、御言を信じ、聖霊に導かれて生きる生涯へ変えられるとの約束を信じて洗礼を受けました。そうすれば、次の受験はきつとうまくいくに違いないと期待したのです。

昭和三六年四月三日早朝、北九州市小倉に流れている紫川の上流で洗礼を授けてもらいました。細かいことは覚えていませんが、快晴に恵まれ、春先の冷気に包まれて水がら上がったときのすがすがしい感覚は忘れられません。河原にたき火をたいて、暖を取りながら、あたたかい飲み物

をいただきました。

その時をきっかけに、牧師館で生まれ育つていながら感じていた居心地の悪さから解放され、神様に一步近づいた感じを受けました。しかし、信仰が自分の身に付くまで、まだまだ多くの戦いを経なければなりませんでした。

高校卒業後、予備校に通うゆとりもなく、自宅で受験勉強に励むことになりました。一年間の受験準備は不安と失望の連続でしたが、幸いにも、受洗したことが精神的な支えとなりました。また、四月下旬に四国の脇町でキリスト伝道会の連合聖会が行われ、私も時間がありませんでしたから、出席することになりました。どんな聖会であつたか、覚えていませんが、そのとき一人の年輩の方と会いました。新学期が始まっているのに、学生服姿で聖会に出ていることで、きつと何か問題があるに違いないと興味を抱いたのでしよう。声をかけて、私の事情を聴いてくれました。別れるとき、私のために祈っているからと励ましてくれたのです。それ以来、そのことを忘れていましたが、翌年初めに、その方からハガキをもらいました。文面には間もなく受験に臨むだろうが恐れないで神様を信じ、御言に立つようにと書かれていました。その時の御言は、ヨシユア記一章九節「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々し

くあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共に
おられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」
でした。受験を間近に控えて落ち着かない状態にあったの
で、この励ましは大きな力であり、御言によって神様の恵
みを体験することができました。この経験はその後の信仰
生活に大きな力となり、この御言は生涯のメッセージの一
つとなりました。

無事に受験が終わり、神様の憐みで大学生になることが
できましたが、人生初めて親元を離れ、関西の地にひとり
で暮らす生活では、祈りと御言を欠くことができません。
神様を信じる者とされた幸いを深く覚えました。同時に、
自立した信仰に立つための訓練期間であったと思います。
四年間の大学生活を通して、神様は十字架の死と甦りの福
音に導いてくださいました。本来、受洗のときに、そのこ
とははっきりすべきだったのでしようが、それをしないで、
ただご利益として、たんなる守護神としての神様であつた
と思います。考えてみると、よくぞこのような無知蒙昧な
ままで、洗礼に導かれたものと恥ずかしい限りですが、
これもひとえに神様の憐みであり、ご慈愛であつたと思ひ
ます。また、信仰は自分の力や状態によるのではなく、一

方的な神様の賜物であると言えます。

大学生活を通しての課題は「己の義」との戦いです。私
は生来気が小さく、小心者、臆病な者でした。そのため、
世間一般の学生のように大胆なこともできず、いつも他人
の目を気にして、身を慎み、真面目の塊で、自分の義、正
しさを誇りとしていました。そのため、心は常に苛立ちと
憤り、つぶやきばかりです。心穏やかに平安になれず、焦
る思いに駆られて他の人々を裁き、攻撃していました。ま
るでハリネズミのようです。大学四年生になり、就職もま
まならず、やむなく大学院へすすむことにしました。その
ころから、一世を風靡した学生運動が始まり、東京大学医
学部問題から、日大闘争、さらに青山、立教と軒並み学園
紛争が波及し、やがて私の居た大学にも飛び火しました。
学生運動をしている者たちの主張には共感できるものが
あり、自分の正義感から心情的な同調者になっていました。
紛争がだんだんエスカレートし始めて、疲れを覚えてい
たころでしたが、下宿の部屋に戻ってきて、いつもの習慣
で聖書を読んでいました。そのとき開かれたのはルカによ
る福音書二三章でした。読み進んで三四節になりました。
「そのとき、イエスは言われた、『父よ、彼らをおゆるし

ください。彼らは何をしているのか、わからずにいるので『この言葉に出会った瞬間、立ち止まりました。これはイエス様が十字架に掛けられたとき、最初に語られた取り成しの祈りです。それまでも何度となく聞いていたし、読んでいた箇所ですが、この時ばかりは初めて出会ったように新鮮でした。それは私の理解がまったく違っていたからです。自分を義としていますから、悪いのは周囲の者たち、彼らこそイエス様を死に追いやった罪人だと思っていました。私はイエス様同様に被害者だから、主のごとく赦さなければいけないと考えていました。それでは到底イエス様の救いの核心に達することができません。そこでもう一度、赦されなければならぬ「彼ら」とは誰かを問いかけたとき、愕然としました。なんと諸悪の根源は自分なのだ。赦されなければならぬのは私であり、私のために主が十字架に命を捨ててくださったのだと、恥ずかしながらそのときはじめて悟ったのです。それまで支えてきた土台がガラガラと崩れる感じがしました。まさに空気が抜けた風船のようです。同時に、今生きているのは主が赦して下さったからであり、赦されて生きているのだと知った時、自分を義とする思いは消えて、肩の力が抜け、人のことも気にならなくなりました。なぜなら、人のことをあれこれ

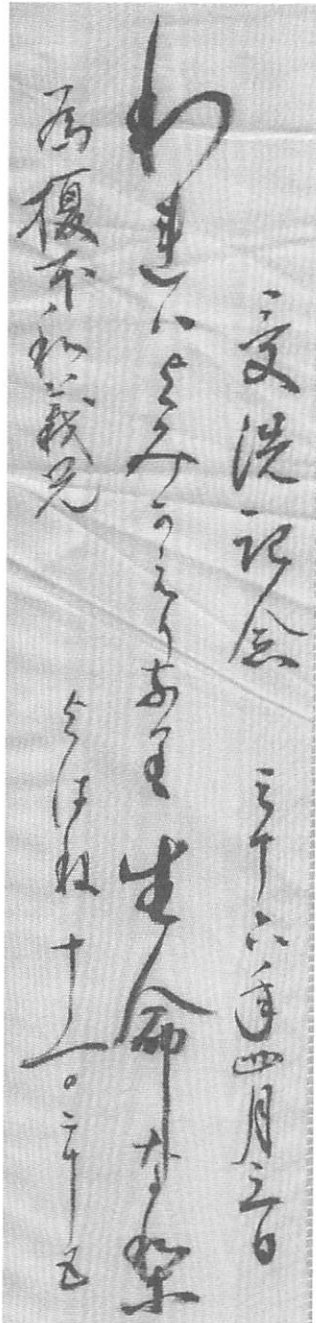
言える自分ではないからです。パウロが「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(ガラテヤ二・十九、二十)と語った心境を共感できるようになったのは感謝でした。

だからと言って、これで全てが終わったわけではなく、その後も就職、結婚、教会生活、海外留学など、いろんな局面で信仰が揺さぶられ、右往左往しながらの旅路を辿ってきました。やがて、一九八四年の年末から年初にかけて、神様の呼びかけを受け、直接献身へと導かれました。それからさらに二十五年、教会伝道の現場で、主のお取り扱いを受けています。

大学に入学して兵庫県西宮に住むことになり、さっそく出席教会を捜し、神戸三宮から近くにあった日本キリスト教団神戸生田教会に出席することにしました。ここは母のいとこにあたる竹田照子さんとご主人の竹田羔一師が牧会する教会でした。時々、礼拝後にお昼をご馳走になったことが忘れられません。大学院に入ってから下宿の近くにある日本キリスト教団西宮教会へ出席するようになり、

礼拝には必ず出席していました。その時の牧師は棟方師で、
理路整然として神学的洞察に基いた説教をしておられた
のが印象に残っています。そこで教会学校教師になるよう
求められ、準備していた時、三月、急に就職することにな
り、名古屋へ転居しました。名古屋では結婚するまでアパ
ート暮らしで、近くにあった自由が丘教会（単立）に通っ
ていましたが、自分の信仰的靈性は低調だったときです。
一九七一年に結婚と同時に転居しました。不動産屋に案内
されたアパートの近くに名古屋一麦教会があり、私と家内
との信仰を訓練されることとなりました。そのことにつ
いては稿を改めて書きたいと思います。

こうして、今に至るまでいろんな中を通ってきましたが、
イエス様がペテロに「しかし、わたしはあなたの信仰がな
くならないように、あなたのために祈った」（ルカ二二・
三二）と語っておられるように、ひとえにイエス様のお取
り成しによつて今の私があることを深く、強く感じざるを
得ません。続けて、主はペテロに「それで、あなたが立ち
直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と言わ
れたように、この小さな私をもそのために用いてくださる
ことを信じて、なお一層、へりくだって、主の恵みに感謝
しつつ、主に仕えていきたいと願っています。これまで背
後にあつて、取り成しの祈りを続けてくださった多くの兄
弟姉妹のご愛に感謝しています。さらなる主の導きを期待
しつつ。



正野 眞 宏 (前田)

「主はわたしの牧者であって、

わたしには乏しいことがない」(詩篇三篇一節)

私が受洗に至った経過と受洗時の様子については、「ぶどうの木」第三二号に詳しく記述しましたので、ここではその後の歩みについて記したいと思います。

これまでの五十年を振り返ってみると、まさに冒頭の御言の通りだったと言うほかありません。実に弱く、迷い出しやすい者が主から離れないで、ここまで来ることができたのは、全くもって良き牧者なる方が、守り導いてくださったからであって、文字通り「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」(第一コリント十五・十)とあるとおりです。

私が受洗したのは、二三歳の時でした。当時の八幡市役所に勤め始めて二年半程度で、社会的経験も乏しく、何事にも迷いがあったと思います。信仰を持って歩み出しましたが、榎本先生から「すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」(箴言三・六)、生活の中で主の導きに従いなさいと教えられ、その通りにやっ行って行こうと思いました。しかし、信仰が幼稚なために、主の導きなど分り

ません。ある時は、道を歩いていて左右二つの道のどちらの道に行くのが導きか、祈りました。行った道で何か起こるか、誰かに会うかもしれないと思っただけです。しかし、分かりません。よし、右だと決めて歩き始めましたが、途中から、いや違ったかも知れないと思ひ直して引き返した事もありました。そんな幼稚さでした。

受洗当時は、黒崎保健所が開設されて間もなくでしたから忙しく、自分の力に余る業務もあり、必死でした。その頃は早天祈祷会が開かれていましたから、それに出席し、帰って朝食を出動していました。早めに家を出て、保健所の裏山の公園に腰かけ、仕事上の悩みを主に訴えたものでした。今考えて、一生懸命だったのです。当時、仕事を終えた時の思いを文と詩にしたものがありますので、掲載します。

ある日、私は超勤で遅くなった。その日ははかどったお陰で、心地よい疲労と喜びに包まれていた。外に出ると、大空に星がまばゆいばかりに輝いていた。私が玄関先の石段を下りた時、小脇に抱えていた弁当がカラカラと鳴った。それが、心の中にも響いた。そして、弁当が私と対等のように思えた。弁当は文句も言わず、黙って私に尽くしてくれる。私はどうか。心を尽して主に仕えるということができずにいる。そう

いう自分が情けなく、すべてを投げ出して使命を果たす弁当がうらやましくなった。それで、私は弁当の気持を詩に書いてみたいと思った。詩とは言えない詩になったが、気持は出ていると思う。

わたしは弁当

朝です

あなたが眠い目をこするとき

私の一日はもう始まっています

あなたが靴を履くとき

私は決意を新たにします

私はあなたの手にぶら下がりながら

朝の空気を楽しみます

私の使命を果たす時が近づきました

私はあなたに好かれるよう懸命です

あなたの箸が進まぬとき

私の心配・悲しみはどんなでしょう

気に入ってくれた時 私は本当にホッとします

そして満足したあなたの顔をじっと見つめるのです

私はあなたを喜ばすことだけが生きがいですからです

あなたが仕事をされているとき

私は明日の装いを考えながら

終わるまで黙って待っています

あなたが疲れた体で私を抱いて帰るとき

外はもう暗く 空には星も輝いています

そんな時、私は自分の使命を終えた喜びの余り

カラカラと声を出すのです

星も私を祝福してくれます

祈りと言えば、こういう事もありました。「私は弁当」と同じ時期だったと思いますが、ある日、榎本先生から、「島崎さんご夫妻が共に入院されて、おばあちゃん（島崎美知子姉）が二人の孫の面倒を見ているが、夜が怖いと言っているので、泊まりに行つて上げてください。」と頼まれたのです。それで、私は勤めを終えて夕食を済ませてから、泊りに行くようになりました。しかし、当時は前述のように仕事が忙しく、私の力不足で、相手方から苦情が出た時など、私は顔を上げられないほど落ち込んでいました。そういう時、暗くなって泊まりに行く途中、島崎さん宅のすぐ裏に草の生い茂った丘があつて、格好の祈り場になっていました。辺りには誰もお

らず、草の中に寝転べば誰にも分かりません。天には万空の星が輝いています。私は主を見上げる力もなく、ただ星を眺めるだけでした。その時、か細い声がありました。あなたが見ている同じ星を、アブラハムも見たのだよ、あの時のアブラハムも信仰を持つことができなかつたけれども、この星のようにあなたの子孫を増やすとの御声を聞いて、彼は信仰を持って立つことができた、あなたもこの星を創造された神が共におられるから大丈夫です……。そう諭されて、私は主を見上げることができ、急に元気が出てきました。ようし、頑張ってみよう。こうして私は立ち直ることができ、島崎さん宅へ急いだのでした。

しかし、次の日もまた失敗し、落ち込んではこの祈り場へ逃げ込み、慰めを受けてから気を取り直す、そんな日々でした。今も星を見るたびに、その時の事を思い起こします。私にとっては、忘れることのできない、貴重な経験でした。

もう一つ祈りで思い出すのは、家が狭くて自分の部屋がなく、すぐ前が国道三号線で車の通りが多く、トラックが通るたびに騒音だけでなく家が揺れる状態だったので、落ち着いて祈る場所ありませんでした。それで夜、近くの小学校の運動場へ行き、そこで祈っていました。ある時、懐中電灯で

照らされ、「君、そこで何をしているの？」と尋ねられました。巡回のおまわりさんでした。お祈りしていると答えても、「お祈り？そりや何だ」というわけです。説明すればするほど、怪しまれます。逃げるようにして帰って行ったということがありました。

もう一つ、私の信仰形成に役立ったのは、日曜学校の教師を頼まれた事です。受洗して二年ほどたった二五歳の時です。まだ信仰が確立せず、幼稚であることは自分が一番分かっています。そういう時に榎本先生からお話がありました。信仰のない上に生来の口下手、とてもできそうもないので、お断りしたかったです。しかし、そうすることは、主の手を押し返すような気がしてそれもできず、渋々引き受けたものの、失敗の連続でした。（この事は、「ぶどうの木」第一号に「落第教師」と題して投稿していますのでご覧ください。）そういう者が、今日まで続けさせていただいた。この事で、否が応でも聖書を真剣に読まざるを得ず、自ら御言に従わなければ生徒の前に立つことができないことを学び、併せて口下手の者の喋りの訓練にもなり、後に議会答弁など人前で発言しなければならぬ立場に立った時、どれだけ役立ったか。さらに市政の最重要課題の仕事を担当した時、自分の力に余る場

面に遭遇して、ただ祈るほかなく、それは私にとって信仰の実習の場でもありました。日曜学校の教師をさせていただいたお陰で、今の私があると言っても過言ではありません。

今日に至るまでには、この他にもいろいろな事があり、主は様々な中を通されましたが、どれ一つとつても、私にとって無駄なものはありませんでした。まことに主は良き牧者であらせられます。



このお証詞を書くときに一瞬心をよぎるものがあります。それはこの五十年の半分以上の間、主を離れて生活したことであります。その結果、同窓生と比べるとき、あまりにも貧しい実りであろう、と思いました。榎本和義兄はいま牧師になられて、私はそのもとで信仰生活を送らせていただいています。また正野眞宏兄は当教会の大黒柱的存在でその御用を全うしていらっしゃるし、正野隆士兄は実業家でそのお証詞は全国的規模で御用に用いられているとお聞きしています。また正野(旧姓調)悠子姉は教会でまた家庭でと実り多き働きをなさっていらっしゃいます。それに比べ自分ときたら……であります。「やっぱりなあ、主を裏切ったからなあ」と、そこに思いが行き着くのです。

私は高校二年生の時から榎本俣雄君の友人ということに教会に近づくことになり、利三郎先生夫妻もいつも家にも招き入れて親しく接してください、教会生活が始まりました。卒業後社会に出て一年ほどして、それまで整えられて来た主の御愛、私の罪のために十字架に死んでくださった主の御愛を知り、何とかそれに応えて行こう、との決心

を与えられて受洗に導かれ、信仰生活を歩み出しました。

しかし、十五、六年たつてキリスト教ではあまりにも制約がありすぎて、現代のこの社会で生きて行くのには不便である。かえってマイナスの部分が大いと思ひ、手つ取り早く教会を離れてしまいました。三交代勤務でありましたから、聖書には「安息日を覚えて、これを聖とせよ」とあるのに、聖日礼拝がともに守られない。その度に主への裏切りを感じる。こんなに一生懸命に生活しているのに「ごめんなさい」と毎回、毎回謝らなければならぬ。謝るばかりの生活だ、つまらない、つらい、心苦しい。実は、それは私の思い違いで謝らなくてもいいんだ、祈つてその解決は主にお委ねすればいいのだ、と今では分かるのですが、そのときは主に従えない者は離れるしかないと短絡的に考えてしまいました。(まるで、自分の力で信仰を守っているように思っていましたし、こうでなければ、という自分の考えをもって神様のことを考えていました。)それほどばかりでなく、自分のしたいことができない。むしろ、これが大きかったと思ひます。自分勝手な生活ができないと、それで主を離れました。それで二六年間主を離れて生活をしていました。家内はその間も教会を離れることなく黙つて共に生活をしてくれました。

しかし、しかしです。榎本利三郎牧師が二〇〇二年四月にお召されになられたその葬儀の時のことでした。その柩の顔を拝見したときに、「わたしは戦いをりつぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」(第二テモテ四・七)と、その顔は凜(りん)んとして語っていました。自分の今いる所と先生のいる所の落差といひますか、全く違つた所、天と地ほど離れた所にいる自分がつかされました。本当に自分のいる所は、自分勝手に思うように楽しくやつて来たはずなのに汚く、その色は失せて白黒の世界であることに気がつきました。一方、利三郎牧師のいる所こそが永遠のいのちに輝いている生涯であり、それこそが私の目標とするべきことだといふことがはっきりと分りました。静かに横たわっている利三郎牧師のお顔から発しておられる、一生を懸けた信仰に対する真剣な気迫に打たれました。この真剣な態度がなければ信仰生活は送られない、と一瞬にして教えられました。私はそれまで今、今、今だけの、自分の損得利害ばかりの世界に生きて来て、未来の永遠の御国への展望といひますか、永遠に対する考えが全くなかったのです。先生はこの後、イエス様が再び来たり給う時「義の冠」「栄光とほまれを冠として」また「命の冠」を頂くだだけだと、いや、もうその頭

には冠が与えられている、と感じました。これは、聖霊が教えてくださったことです。一瞬のうちに真理を悟らせてくださいました。これは私のペンテコステだと思えます。「御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(第一コリント二・十)とありますように、一瞬にして悟らせていただきました。一瞬と言いつても、そのことを切っ掛けにだんだんと整えられましたけれども、今思えば一瞬でありました。そこからもう翻ることはありません、と言つても弱い人間でありますから、「御霊を消してはいけない」(第一テサロニケ五・十九)、「聖霊を悲しませてはいけない」(エペソ四・三十)との警告を日々思つて生活しております。

それからは、現在に至るまで、「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇十六・八)と、御霊に導かれる道は「まっすぐ」で間違いがなく動かされることもない。先の主に背いて自分勝手に生きていた時代に判断したこととは間違いだらけだったことを思い出します。全くろくな判断ができない、一貫性がないものでした。この暗闇の場所に御霊が注がれ光がさしたのです。私も「神の子」であ

る保証をしていただきました。確信が与えられ、喜びの生活、光の中を歩む生活に引き戻していただきました。本当に感謝です。この上に自分には御霊の実がない、少ない、見えない、などと言うことができるでしょうか。そんなことはどうでもいいことです。主が与えてくださることです。

ブドウ園に植えられたいちじくの木のたとえのように、また放蕩息子のたとえのように、神様は長い、長い忍耐と限りない御愛をもって私を赦し待ち望んでくださいました。また、利三郎牧師ご夫妻をはじめ多くの兄弟姉妹、家内などの隠れたお祈りの結果主の憐れみにあずかることができた、と感謝しても感謝し尽くすことができません。

「あなたは、わたしに従ってきなさい」(ヨハネ二一・二二)とおっしゃる御方にお従いし、「神は愛である」とおっしゃる御方の真の御愛に満たされ、「わたしがあなただがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ十五・十二)とおっしゃるイエス様のいましめを守り、「わたしもあなたがたをつかわす」(ヨハネ二十・二一)との御言を信じて、毎日、毎日、力を尽くして、心を尽くして、生きて行こうと感謝しています。

正 野 隆 士

(日本イエス・キリスト教団 岡南教会)

「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」

(ヨシユア記一章九節)

私は一九六一年四月三日一九歳の時、北九州市小倉の紫川上流にて、八幡前田教会の榎本利三郎牧師の司式によって、八人の方々と共に洗礼の恵みに与りました。この事を思う時、只々感謝に堪えません。それも兄と一緒にでしたし、将来、弟の奥さんとなる調悠子さんとも一緒だったのは、神様の不思議な導きを感じます。

しかしながら、私の信仰の歩みは決して順調ではありませんでした。自分の欲得を優先する醜い心を、主は様々な取り扱いを通して示して下さいました。

当時の私は、家があり豊かではないため大学受験は諦め、就職をと都市銀行を志望しましたが、二次試験で不合格になり、北九州八幡信用金庫に就職していました。せめて夜間大学に行つて再度チャンスをとの目論見で、九州工業大学の二部に受験するもこれも落ち、八幡大学(現在の九州国際大学)

二部経営経済学部に通っていました。

多少悶々とした思いでいた大学卒業時に、再度の一流企業へのチャンスを待ち望んでいました。しかし、これも夜間大学ではそれほど就職先の案内は来ず、また来ていても働きながらの勉強ですから、学力もあまりついていないため、駄目だっただろうとは思いますが、とにかくなかなかうまくいきません。「運が悪いな。家の商売が食堂だったから、都市銀行はダメだったのだ。」と親戚の叔父さんが言います。実力のなさを人のせいにしてクヨクヨするような、情けない人間だったことに気付いていませんでした。

その年の十一月、居ても立つてもおられず、成功を夢見て、無謀にも信用金庫を退職し、一番嫌いな話すことが仕事のセールスマンになって実力で出世しようと思いい立ち、中途採用の河合楽器の営業社員としての道を選びました。生活に苦労している両親を楽にしてあげたいとのいい格好の思いもありましたが、心底は出世欲の強い、負けず嫌いな自分中心の人間だったのです。夜行列車で旅立つ夜、車窓から外を眺めながら、これでもう両親の死に目には会えないかも知れない、親孝行どころか心配かけて親不孝者かも知れない、もう後戻りは出来ない、頑張るしかないなあと涙したことを憶えています。(後から聞いた話ですが、母はこの子がセール

スなど出来るはずがない。失敗して舞い戻って来るだろうが、これも経験だから何も言わずに行かせてあげようと考えていたそうです。」

案の定、河合楽器でのセールスの世界は苦難の連続でした。ローリングと違って新しい家に軒並み廻ってお客様を見つける仕事です。話すのが不得手なうえ、度胸もないタイプですから、家に入ることすら恐くて入れない始末です。それでも必死に頑張つて上位の成績を残していましたが、中途採用ということ、何と一年半後にやっと正社員に採用するとの通知に、愕然としました。新卒入社と中途入社とは道が違つていて、出世の望みなく生涯セールスマンとして終えることを知りませんでした。ガーンと頭を打たれ、夢と希望が吹っ飛んでしまいました。

勿論、教会は同じ活水の群の高橋国三郎・義夫先生牧会の金町教会に行つてはいました。しかし、私にとって、最大の望みを断られた人生最大の危機に、信仰の確信が得られませんでした。それどころか、折つても聞いてもらえない、神様は本当にいらつしやるのだろうか？疑問さえ湧いてきます。教会学校から教会に通い、真面目に生き、成績もまずまず、スポーツも多少は出来る自分が、何でこんなにやる事なす事

うまくいかないのだろう。こんなに困っている時に応えてくれない神様なんか信じて何になるだろう。むしろ、くそ真面目に生きる生き方より、面白おかしく、太く短く好きに生きた方がよっぽど良いのでは……と考えるようになりました。むしろ神様に問題をぶつけるような、不信仰とヤケになる生き方をしようとしていました。

そんな二四歳の時、神様なんていないと、どうしても否定出来ないのは、母からの毎週のようにくるハガキであり、母の信仰のゆえだと気付きました。苦しい生活の中で、生命がけで信仰している母の姿。また、兄が中学二年生の時に書いた作文「永遠とこしえの命」にもあるように、末弟弘巳ちゃん（弘巳ちゃん）の召天により、どうしても神様はいない、天国などないと、否定は出来ないのです。

そこでもう一度神様に祈つてみよう、求めてみよう、と決心して祈りました。ある時は河原で、ある夜は公園で、「神様、もしあなたが生きて働き給う方であるなら、私に示して下さい。私はあなたの事が分からないのです」、涙し、必死で祈りました。そうしたらある夜、「わたしはあなたに命じたではありません。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」との御言が、鮮明に示されるではあり

ませんか。これは、私が東京へ旅立つ時、私の聖書の裏表紙に母が書いてくれていた御言でした。知ってはいました。しかし、この時はつきり霊の眼が開かれました。ああ、神様はこんな困っていて絶望の中にいる私をさえ、「共に居るよ、あなたを支えているよ」と大いなる愛をもって待っていて下さったのです。

そのうえ、その時同時に示されました。私は真面目な人間と思いがついていたが、そうではない。私の親友と九州工大二部を受験した時、彼が合格し私は不合格でした。何故自分が合格し彼が落ちなかったのかと、彼を妬ましく思い、親友の合格を喜んであげられませんでした。何と私は冷たい心の人間だったのかと罪を示されました。そのうえ、神も仏もない、何で俺を祝福しないのだと豪語するような最低の人間だった。それなのに、神様は「共にいるよ」と愛を示して下さっている。「神様、申し訳ありません。こんな者の罪を赦して下さい、私は神様を信じて、生涯あなたに仕えます。出世も金持ちになることも、もういりません。どんな境遇の中でも喜んで仕えます」と、心から祈りました。

その時、私の心は罪赦された喜びと平安が満ち溢れました。その喜びと平安は、五十年経った今も全く変わらない聖霊のバプテスマだったと思います。

それからの私の人生は一変しました。状況は全く変わりませんが、神様が共にいて下さるといふ喜びと、今の仕事・生活を最善に生きようとの希望がありました。

教会に行くのが楽しく、また奉仕を喜んでしていましたし、教会の周辺が営業地域でしたので、よく先生宅へおじやましていました。

ところが、それだけでも大感謝な恵みの人生をいただいたにもかかわらず、主はさらに私にビジョンと祝福を用意して下さいました。「まず、神の国と神の義を求めなさい。……」主に従うことは祝福がついてくると実感させていただく出来事が、次々と示されます。

金町教会で伝道集会があり、リンレイワックス社長の竿代靖氏が講演と証詞をなさいました。その中で、「私の会社にはクリスチャンの社員が多くいます。教会ではよい奉仕をしているが、会社では証詞になるような働きがないのです。」と話され、ドキッとしました。今の自分と同じではないか。その後、神様に祈りました。「主よ、私は今の情況に不満がある訳ではありません。もし神様の御心ならば、私をトップセールスマンに、さらに営業の心髄を私に教えて下さい。主の証詞が出来るような生き方を導いて下さい。」祈りは聞かれました。さらに兄から内村鑑三著の「後世への最大遺物」の本を薦

められ読んでみて示されたのは、営業職もよいが、もしも主が赦されるなら事業の道へ進みたいとの思いでした。その願いが与えられ、私は祈りました。これも導かれ、まもなく「岡山でミサワホームの代理店を開設したから来ないか」と誘われました。河合楽器の研修所で私を訓練していた教官が退職後、親元の住宅・不動産の会社を建て直した後、独立されたのです。ここでもトップセールスとしての実績と真の営業手法を評価して下さったことだっと思えます。この時学んだ地域密着テリトリー営業がその後の岡山県での販売会社の事業経営に大いに役立つことは言うに及びません。

しかし、事業の道も決して平坦なものではありませんでした。でも心は主と共に居てくださると平安でした。

創業時、今晩中に受注し、明日中に一〇〇万円の契約金をいただければ倒産するという危機にも、祈りによって、「下には永遠の腕がある」(申命記三三・一二七)との御言で勇気づけられ、その晩二件の成約をして倒産を免れました。

四十歳の時、先代社長が急逝された後、新社長として経営に不安を憶えた時も祈り、「あなたがたは鼻から息の出入りする人に、たよることをやめよ」(イザヤ書二・二二)と、リーダーとしての経営方針や戦略構築を、主と聖書の御言からいただく事が出来ました。

もう一つ私にとって大切な忘れられないことがあります。

それはある時、事業を進めることにはある一面、金儲けのために命がけでがんばっているようなもの、聖書には「富んでいゝる者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(マタイ一九・二四)とある。これでは私は地獄へ向かってまっしぐらではないか。不安になり、母教会の榎本先生に相談しました。先生は笑いながら、「隆士さん、その続きに聖書には何と書いてありますか？」

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできないことはない。」

「分かりました。イエス様から離れないで信仰を持ち続けることなんです。」

事業家の私にとりましては、無くてならない教えでした。そして、母が私の聖書の裏表紙に書いてくれた、御言「わたしにつながっていないなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていないよう」(ヨハネ一五・四)の意味もよく分かりました。

このように二六歳から四三年間、事業経営者としての歩みは、祈りなくしてはありませんでした。様々な困難の中にも、主は必要な知恵と力を与えて下さり、豊かな恵みをもって確

かに答えて下さいました。

主にある人生は、何という恵みの人生でしょう。ドラマチックで一喜一憂も多いが、主が傍にいて下さる故、何の不安もありません。そのうえに、いただいたその証詞や知恵を通じて、多くの方々に伝え、お導き出来る幸いを心から感謝しています。

残る生涯も、仕事、教会の働き、YMCAや公職、ビジネスマン聖書教室やインターナショナルVIPクラブ等の各集会を通して、この福音を伝え続けることができるようにと願っています。

正 野 悠 子 (大濠)

今年で私は、受洗に与り五十周年を迎えます。私のような者が救われ、半世紀の間、信仰を持ち続けさせていただいたということは、人間業ではなく、まさに神業です。

生きる希望もなくさまよい、自殺を考えていた私は、小学校の恩師からの一枚のハガキにあった「教会に行ってください

い」との一文と、その横にびっしりと列挙された八幡市内のキリスト教会名の中から、目にとびこんできた、「八幡前田教会」(通勤電車の中から見えていたようで)の文字に誘われて、次の朝初めてその礼拝に出席させていただきました。昭和三五年五月第一日曜日の事です。

御説教の途中でした。最後部座席の端に座りまして間もなく「主はわたしたちのためにいのちを捨ててくださった。それによつてわたしたちは愛ということを知った。」(第一ヨハネ三・十六)の聖句が、心の耳だったのでしようか、大きく響いて聞こえました。その瞬間思わず「生きていこう！」と心の中で叫びました。その日は、どなたにも挨拶せず、逃げるように帰りました。でも次の日曜日の待ち遠しかったこと！

間もなく礼拝は勿論、各御集会にも出席させていただきました、一人で一生懸命聖書を読むようにもなりました

教会に行き始めて、二、三週間後の金曜日の夕方、中学一年の弟が、月曜日に遠足費を持って行かなければ、と言うのです。私は当時、その弟と二人で生活をしておりました。母は亡くなり、父は行方不明という事情でしたから、役所に就職して二年目の私の給料で細々と生活をしていました。給料前で財布にはお金はない。遠足には行かせてあげたいけれど、

質屋に持っていく品物もない。翌日は悶々とした気持ちで出勤しました。

土曜日で半ドンの終業ベルが響く中、机のまわりを掃いていました。その時、どこで読み覚えたのか、「『求めなさい、そうすれば与えられるであろう。』とあります。神様が居るなら、私に必要なお金を与えて下さい！」と心の中で何度も叫んでいました。すると、電話の音。受話器をとった先輩が私に向って、「急いで庶務課に行つて。」といました。何事かと、私は恐る恐る三階までかけのぼり（古い庁舎でエレベーターなどありませんでした）部屋に入りますと、給与担当者ニコニコしながら、「ごめんね、遅くなつて。」と言つて、一通の封筒をくれました。お辞儀をして受け取り、階段を下りる途中で封筒を開けて驚きました。なんとそこには、新券の五百円札が一枚と数枚の小銭、そして明細書が入っているではありませんか。身体が震えました。数ヶ月前、出張所にお使いに行った時の手当だったのです。出張手当なるものがあることも知らず、それを手にしたこともなかった私でした。主に祈ることも知らない私に、主はその時、御言のゆえにご自身をあらわしてくださったのでした。言うまでもなく、次の月曜日には遠足費を持たせることができ、当日は弁当も作ってやることができました。あの時の感動は生涯、忘

れることができせん。また、このことは、人を頼みとせず、神様だけをお頼りする信仰生涯の土台ともなりました。

私を助けて下さる方が共に居て下さると信じることできた私は、生きる力と喜びを与えられていきました。しかし、「十字架の救」ということがわからず、苦しいときの神頼み、ご利益信仰だったので。

母と私たち姉弟の三人を不幸に陥れたのは、酒に溺れた父親だという、父に対する憎しみをどうすることもできず、ふと涙を流しては、自己憐憫に陥っていました。

ある礼拝後、受洗希望者は申し出るように、との牧師先生のおすすめを聞き、ためらわず願ひ出しました。

受洗準備会での先生の解き明かしを通して、イエス・キリストを十字架につけたのは、罪を犯し続ける私自身であることを知りました。先生のお導きに従い、思ひ出すままに、それまでに犯してきた罪と思われれることを言い表わし、祈つていただきました。父に対する憎しみや、拾った二百円のお金を届出もせず使い込んだこと。嘘をついてきたこと……思ひ出すままに。

先生のお祈りの最後に、大きく「心安かれ。汝の罪ゆるされたり」（マタイ九・二）と言われた御言が、それまでの暗い心を吹き飛ばして下さいました。

数日後、小倉の紫川で榎本利三郎師司式のもと、バプテスマに与ることができました。肩の荷は取り去られ、罪ゆるさされた喜びに満たされた私には、その朝の光は最高にまぶしく感じられました。

それから数年後のこと、ストーブにかけていたやかんの、沸騰した湯が少し足にかかり、慌てて水道水で冷やしながらお祈りしました時、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。」（創世記十七・一）との御言を与えられ、それによりすがりながら祈り続けましたら、火傷のあとも残らず、異常なく守られました。その時からこの御言は私の生涯の聖言の一つとなり、事ある毎に助けていただきました。

その後、神様の憐れみで、前田教会の修養生としてお受入いただき、榎本利三郎先生、百合子先生御夫妻の、主に従われる実生活を通して、聖書に基く信仰生活のあり方を学ばせていただきました。その中で「死に至るまで忠実であれ」（黙示録二・十）の御言に励まされてきました。六年後、クリスチャンとの結婚の道が開かれ、信仰生活の実地訓練を受けさせていただき、事ある毎に祈っては、甦り給いて共に居給う主にお会いすることが許されてきました。

何度神様の愛を疑い、神様に背を向けたか分からない不真実な私を、主は赦して下さり、忍耐をもつてここまで導いて下さいました。

又、三人の子供達が小学生だった頃（長女六年、次女四年、長男一年）遠足の前夜、真夜中から夜明けにかけて、私はひどい腹痛で一人苦しむ、「神様、助けて下さい、助けて下さい。」と祈り続けました。長く感じられた夜でしたが、窓が薄明るくなったところ、スーッと痛みが治まり、朝食の用意も弁当作りもすることができたのでした。子供達は楽しそうに学校に出かけていきました。その後、玄関に座り込み、神様への心からの感謝を捧げました。又、祈りました。「この弱い私を憐れんでください。子供達が成人するまでで結構ですから、健康をお与えください。母親としての務めを果させて下さい。」と。次の日もその次の日も祈り続けました。その毎日の中で「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。」（哀歌三・二二〜二三）の御言を深く感じ、味わわせていただきました。今では、末の子も三十を過ぎ、家庭までも持たせていただきました。主は本当に御真実で、御愛にみちたお方です。

「神の言葉はみな真実である。神は彼に寄り頼む者の盾である。」
(箴言三十・五)

「苦しみにあつたことはわたしに良い事です。これによってわたしは、あなたのおきてを学ぶことができました。」

(詩篇一一九・七二)

この二つの御言は、その通りです。ハレルヤ!

残ります時は少ないですが、主の御愛に心から感謝しながら、主の御旨に従順に御従いして、主に喜んでいただければ、御仕えさせていただきたいと願っております。

河 本 米 子 (前田)

「まず神の国と神の義とを求めなさい。
そうすれば、これらのものは、すべて
添えて与えられるであろう」(マタイ六・三三)

神様の奇しき御愛の御計画によって、教会へ導かれて求道一年余、創世記の始めに、「はじめに神は天と地とを創造された」、創造主である真の神様を教え示されました。「先ず」この神様をもっと知りたい、分かせていただきたい、どうか信じる者と成していただきたい。切なる願いをもって、受洗を決心させていただいた時に与えられた御言です。

それまでは真の神様を知らず、また知ろうとせず、自分の努力で何とかやっけて行かなければと、当然のことながら自己中心な言動のみに終始してしまいましたので、いくら努力しても満足は得られず、空しいものでした。これではいけないと、悶悶と悩むばかりでどうしようもなく、何が真実なのか、世の中、不公平な事ばかりと、不平不満の塊でした。本当に神なく、救いなく、希望なく、長い間、神様に背を向けた惨めな滅びの者でした。

こんな者を神様は見捨て給うことなく、御子イエス様をも十字架にかけてくださり、私の罪を罰して、贖い取ってくださいました。計り知ることのできない神様の御愛とご忍耐を示されて、心から申し訳なく、有り難く、深く感謝いたしました。

結婚を機に八幡前田教会に導かれて、神様の憐れみによって「主を主とする信仰」へと、新しく踏み出させていただきま

した。と、申しましても、何分生まれただけの、それも未熟児同然の信仰で、お従いしたくても歩むことができません。ヨチヨチ歩きに始まって、あちこちに頭をぶつけては転び、「またやつてしまった」と、自我との戦いの日々でした。

その度ごとに、時分時を弁えず、夜昼構わず、牧師館に駆け込んで泣き事を聞いていただき、「先生、お祈りしてください」と、助けを求めて寄りすがり、執り成していただくことの繰り返しでございました。仕事上、多忙続きの日々、何とかしてお従いしたいと一途に願っていても、次々起こる現実を見ては主を見失い、失望、落胆、不信仰へと沈んでしまう、弱い愚かな者でした。

ある時、榎本利三郎先生は、「ひと度あなたを救い取ってください。さつた御方は、事あるごとに水の中へチャポンと落としたりして苦しめたり、また引き上げて喜ばせたりなどなさる御方ではありませんよ」とおっしゃって、慈愛の中にも厳しく諭してくださいました。

讚美歌 五一四番

一 弱き者よ 我にすべて

任せよやと 主はのたもう

主によりて贖わる

わが身の幸は みな主にあり

二 岩の如く かたき心

砕くものは み力のみ

主によりて 贖わる

わが身の幸は みな主にあり

この尊い御救いに与らせていただいて、今年で五十年でございます。その間、様々な事がありました。しかし、何一つ損われることなく、主にあつて生かされている幸いの身は、どんな時にも主が共にいてくださり、絶えず折りに適う御言をもつて慰め励まし、力づけて今日までお導きくださいました。

「見よ、私は主である。

すべて命ある者の神である。

わたしにできないことがあるうか」(エレミヤ三二・二七)

不真実な者を見捨て給わず、それどころか、変わり給うことのないご真実をもつて支えていただき、唯、主の憐れみに囲まれ、持ち運ばれて参りました。主を仰ぎつつ、感謝、賛美するばかりでございます。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、

ご計画に従って召された者たちと共に働いて、
万事を益となるようにしてくださいる事を、
わたしたちは知っている」(ローマ八・二八)

「あなたに選ばれ、あなたに近づけられて、
あなたの大庭に住む人はさいわいである。
われらはあなたの家、あなたの聖なる宮の恵みによって
飽くことができる」(詩篇六五・四)

正野百合子(前田)

今回の「ぶどうの木」の特集で、今年で受洗五十年を迎える
方の証しを載せることになった旨を、主人から聞きました。
私もちょうど同じ年に北九州復興教会で受洗したのです
が、書くことの苦手な私は、別の教会で、同期ではないから
出さなくてもよい、と思うことにしました。

しかし、書かないでいると、「あなたが五十年の間受け
た恵みはどうなるの」という思いになりました。ちょうど、ペ

テロがカヤパの庭にいた時、女中さんから「あなたもイエスの
弟子でしょ」と言われた時、「いいえ、違います」と否んだ箇所
が思い出され、一言でもいいから感謝しようと思いました。

私が初めて教会に行ったのは、高校を卒業し、八幡製鉄所
の看護学院に入学して一ヶ月経った五月のことでした。就職
試験に失敗し、進学はさせないと言う父に失望し、私でも何
か人の役に立つことができたらと思って、学費と寮費のいら
ないこの学院を選んだのでした。

しかし、何事にも自信がなく、自分に失望していた私は、
母がいつも祈っているよと言っていたし、高校の同級生も行
っていた教会に行ってみたくなりました。一人で行くのも心
細いので、姉と一緒に来てもらいました。

初めての教会では、最初から涙が溢れて感激し、それから
毎週教会に行くようになりました。夏休みや冬休みで里帰り
した時は、母が以前行っていた飯塚のナザレン教会に通いま
した。

けれども、しばらくすると、教会へ行きたい気持のある一
方で、せっかくの休日、自由にあれもこれもやりたいと思う
ようになり、山登りや旅、ヒッチハイクで友達の田舎に行っ
て遊んだりもしました。他の求道者が洗礼を受けられるのを

見ると、私達もこのままでいたら神様から離れ、元の生活に戻るのはないかと思うようになり、春休み(教会へ行くようになって十ヶ月目)に洗礼を受けました。

それからは各集会に励み、卒業試験中も、礼拝を守りました。卒業してからは、夜勤をしてそのまま礼拝に出たり、勤務を代ってもらったりして、なるべく礼拝に出るようにしました。

何年か経つと、教会の方や病院の患者さんの家族の方からお見合いの話しを持って来てくださいました。母が(父の理解が得られず)教会に行けないのを見てみると、結婚するならばリスチャンが良いと導かれ、祈るようになりました。もし与えられないなら結婚はしないと決心して間もなく、教会の方から正野さんを紹介されました。

クリスマスや新年聖会などの教会の行事でお互いが忙しく、三回くらいしか会っていなかったので不安もあり、先方の親との同居などいろいろ条件もあって、父も反対しました。しかし、神様に従って歩みたいという願いは叶えられると思います、決心しました。その時に与えられた御言は、「わたしたちは、見えるところによらないで、信仰によって歩いているのである」(第二コリント五・七)でした。

それから四三年が経ちました。三人の子供も与えられ、いろいろな事を通して、神様は訓練し、折りに合う助けを与えてくださいました。一番感謝なことは、あれほど反対していた父を、仏教からイエス様を信じる者に変えてくださり、母も一緒に教会に行けるようになった事です。神様は、私に一番良い事をしてくださったと、感謝しています。

「神は、神を愛する者たち、すなわちご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、わたしたちは知っている」(ローマ八・二八)
「主よ、終わりまで仕えまっらん」(讚美歌三三八番)

下 川 薫 子 (前田)

私が受洗して、昨年で五十年が過ぎました。この間の信仰の歩みを振り返って、数々の神様の恵みに感謝したいと思えます。

私がキリスト教に出会ったのは、小学校一年生の頃、「光の子供会」という集まりがあって、そこで子供讚美歌を歌い、

聖書の話聞いたのが始まりでした。その時は、伊規須先生、東先生、熊畑先生が伝道されていました。

当時、私の家は皿倉ケール駅の近くの急な坂の上であり、祖父母、両親、姉妹三人の七人家族でした。父が将来の事を考えて、平地の場所への新築計画が持ち上がりましたが、まだ住宅ローンのない時代で、鉄筋ブロックの二階建てと大掛かりな工事であったため、費用の工面等で、堅実な祖父と行動的な父との間で争いが絶えず、その都度、母は二人の間に入っては心を痛め、私と二人の妹は奥の部屋に入っては子供会で習った歌を歌い、不安な気持ちで争いが収まるのを待つことが度々でした。

そして高校への進学を迎え、私は迷わずミッションスクールへ進みました。学校での宗教の授業を通して、少しずつ神様のことが理解できるようになり、一年生の秋に伝道会が行われ、牧師先生が「イエス・キリストを救い主と受け入れ、洗礼を受ける者は前に出るように」と言われた時、私は何の躊躇もなく、見えない力に押し出されるように進み出て、受洗を決意しました。そして、昭和三五年三月、榎本先生司式の下、紫川で受洗しました。その時の感動は、今も忘れることができません。

その頃から新築工事が始まり、昭和三五年十二月に新居が完成し、新しい生活がスタートしました。しかし、そんな平穩な生活もつかの間、昭和三六年七月に、消防署に勤務していた父が急逝し、翌年には祖父が他界、と次々と試練が押し寄せてきました。残された家の借金と家族の生活は、総て母の肩にのしかかり、母は一家の大黒柱として、家族のために働いてくれました。二年続いている不幸事に、いろいろな宗教の方が誘いに来ましたが、私が教会に通っていたことで、家族が教会に熱心に足を運ぶようになり、榎本先生の導きを得て、昭和三九年に母と次女洋子が受洗しました。その後、四三年に三女由美子、四四年に伯母水村静江、四六年に水村千恵子と、次々救われて行きました。

「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒行伝十六・三一)

高校を卒業後、地元の金融機関に就職し、母の手助けをしていました。年頃になり、父の親戚から女手ばかりで大変だろうと心配して、父の甥を養子にとの話が度々持ちかけられました。母はその件については私に強要することではなく、只ひたすら神様に祈って導きを待っていたのです。

その祈りに、神様は奇しき御業を示してくださいました。当時、家の建築費の返済があり、下宿をしていましたが、そ

ここに主人が下宿人として送られてきました。その頃の主人は痩せていて暗い感じがして、気にもしていませんでした。甥との養子の話も結論が出ていませんでしたので、まさか結婚するとは想像もしていませんでしたが、神様の計画は人知では測り知ることはできません。神様の御計画に組み込まれていたのです。

昭和四一年に主人と結婚し、新しい生活がスタートしました。主人は信仰には全く関心を示さず、この世の享楽に浸っていました。榎本先生に家庭集会を開いていただき、主人の救いのために祈っていました。私の願いは一向に叶えられませんでした。しかし、神様はまことに真実な御方です。私の長年の祈りに応えてくださいました。主人が突然に洗礼を受けたいと自ら言い出した時は、耳を疑うほど驚きました。昭和六十年四月、従兄弟の水村光義と一緒に受洗し、水村兄は献身まで導かれ、現在は津田教会の牧会の御用に当たっています。

私が願っていました、夫婦で礼拝を守らせていただき、共に主を賛美することができずことは、何よりも幸いな時です。信仰を持ったからと言って特に問題がなくなる訳ではなく、以前に増しての試練があり、戦いがありました。主人の仕事のこと、子供の進学、結婚、母の病氣、妹の癌との戦い

と、そのような試練の中を通ることにより、神様の御愛を深く知ることができるようになり、揺らぐ事のない信仰へと導かれています。神様のなさることは、何ひとつとして無駄なものはなく、全てを益と変えてくださることを、確信させていただきました。

母が召される二年前頃、ポツリと一言、「薫ちゃん、ありがとう。あなたが教会に行ってくれて感謝するよ」と言った言葉が、心の奥に刻み込まれています。母の人生は苦難の連続でしたが、神様に支えられ、共に歩いた事に対しての感謝と喜びの気持の表れだったようです。

「見よ、わたしは主である。すべて命ある者の神である。わたしにできないことがあるか」(エレミヤ三三・二七)二人の娘は、まだ信仰を持っていません。祈りの課題は残されています。この地上の生活がどれほどあるか分かりませんが、母は晩年に私に語ったように、最後の時に娘達に信仰の素晴らしさを伝えられるような信仰を持つことができるように願いながら、励んでいます。

「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」(第一コリント十五・十)

基督伝道隊 戸畑教会の歩み

榎本和義 牧師

「彼らはその悩みのうちに主に呼ばわたったので、主は彼ら
をその悩みから助け出し、住むべき町に行き着くまで、まっ
すぐな道に導かれた。どうか、彼らが主のいつくしみと、人
の子らになされたくすしきみわざとのために、主に感謝する
ように。」(詩篇一〇七・六〜八)

二〇一〇年七月初めでしたが、戸畑教会の牧会者である伊
規須太郎師は体調を崩され、急遽、入院することになりました
た。それまでも、歩行困難などで、車いすでの生活を余儀な
くされていました。しかし、いろんな困難にもかかわらず、
介護制度のヘルパー援助などを利用しつつ、努めて自立した
生活を送ってきました。殊に、奥様の泰子師を天に送られて
から、ここ数年弱さを覚える状態でした。私どもも見守って
きましたが、一人での生活を維持することが困難だと感じる
ようになりました。

入院後、一月ほどで体調は軽快しました。しかし、以前ほ
どの体力がなく、戸畑教会での牧会伝道活動が続けられない

状態となりました。先生のほうから、教会を一旦閉鎖したい
旨の申し出があり、事後処理にあたることになったのです。
同時に、退院後の先生の生活場所を探すことも必要でした。
いろんな施設を祈りつつ見て回り、その結果、神様は最善に
して最高の場所を備えてくださいました。八幡東区大蔵にあ
る「パレス八幡」という介護付きケア・ハウスへ八月下旬に
入居しました。長い間、戸畑の地で伝道された先生がゆつく
りとくつろいで余生を過ごされるようにと願っています。

そのような次第で、やむなく教会としての活動を一時休止
することになりました。二〇一〇年七月二五日、聖日礼拝を
戸畑教会で兄弟姉妹と共に守り、その午後、感謝会をして、
これまでの主の恵みを感じつつ、新しい道を期待して終わ
りました。これからどのように神様が導いて下さるか、祈り
つつ待ち望んでおります。とりあえず、礼拝が出来なくても、
平日になんらかの形で集会が開かれるようにと願っています
ので、お祈りください。これまで、戸畑教会で信仰を守って
こられた兄弟姉妹は引き続き続いて八幡前田教会で魂の養いを受
けることとなり、以来、現在まで励んでおられます。

このような現況のなかで、今に至るまでの戸畑教会の歩み
を振り返って、神様のみわざを記録しておきたいと思えます。
詳しい事情を知る人が居なくなってしまうから、不十

分な情報ですが悪しからずご了承ください。

戸畑の地に福音の種がまかれたのは昭和三十年代の事です。当時、八幡前田教会の信徒であった加藤雷典・千代兄妹が八幡製鉄所（現在の新日鉄）の沢見社宅に転居してからです。加藤兄妹は住居である社宅を開放して、毎週土曜日の午後、「土曜学校」という子供集会を開いていました。兄妹にも幼いお子さんがいたので、その友達など近所の子供たちが十数名ほど集まってにぎやかな集会が開かれていました。私も何度か参加した思い出があります。やがて、加藤兄妹とご家族は転勤によって堺市へ移られました。そのころ（昭和三四年頃）だったと思いますが、加藤兄妹は戸畑の伝道のためにと、戸畑教会がある土地を主の恵みに感謝して捧げられました。加藤兄妹がいなくなり、それまでの「土曜学校」は解散することになったのです。

その後、昭和三六年に宗教法人基督伝道隊八幡前田教会の飛び地境内地として登記されましたが、宗教施設としての利用を明確にしなければなりません。そのため、その前年、昭和三五年に伝道所を開設することとなり、平屋建ての集会室と住居を併設した伝道所を献堂しました。九月四日に献堂感謝会をしています。伝道所での集会は週日の夜、恐らく木曜

日の夜だけだったと思いますが、伝道集会が開かれていました。主に、戸畑に住んでいる八幡前田教会の信徒を中心に集まっていました。また、先に述べた「土曜学校」の再開という形で、土曜日の午後、子供のために土曜学校をしばらくやっていたいました。集会以外の日に無人にしておくわけにいかず、留守番役として、昭和三五年に結婚した伊規須師夫妻と伊規須師のお母さんとに住んでいたきました。やがて、一九七三年（昭和四八年）三月四日、伊規須師は直接献身へと導かれ、それまでの仕事を辞めて八幡前田教会での献身修養生活に入りました。

一九七六年（昭和五一年）十月、戸畑開拓伝道として日曜日の午後三時から日曜学校（子供集会）、午後七時半から伝道集会、木曜日夜七時から伝道集会と、定期的に始められました。また、一九八五年（昭和六十年）六月六日から、「テレホン聖書」という名前の電話を通して聖書のメッセージが聞ける伝道も始まりました。

一九八六年（昭和六一年）三月二三日、伊規須師が按手礼を受け、正式に戸畑伝道所へ専任者として派遣されました。それにともなつて、伝道所を改めて、「基督伝道隊戸畑教会」として発足しました。

同年三月三一日から四日間、教会周辺へ案内のトラクトを配布し、四月四日に教会設立記念特別集会在開催されました。四月六日は教会設立後の最初の礼拝で、ここから始まりました。



当時の集会スケジュールは、日曜日八時半から日曜学校、十時から礼拝、午後三時から第二日曜学校、夜七時半から伝道集会、水曜日午前に第一祈禱会、夜に第二祈禱会、金曜日午前に祷告会、火曜日から土曜日まで早天祈禱会。土曜日会堂掃除となっていました。初期の主な会員は伊規須師夫妻、岩井姉、畠山姉、野村姉、松山兄、久保田姉、内田姉、緒方兄姉、瀬野姉、六月一日に受洗した畠山宏兄、求道中の大楽姉などです。

それから五年ほど経過して、教会堂を新改築することになりました。一九九一年（平成三年）四月二三日に新会堂定礎式をしました。六月十二日が新会堂棟上げ、八月二六日新会堂へ引越しました。一九九一年九月二三日、戸畑教会会堂落成感謝会が行われ、大勢の方々と共に新会堂があたえられたことを喜び、主に感謝しました。

新会堂の講壇前の床には羅針盤を模した方位計が記され、会堂後方の窓には、船舶の順行・逆行を示す赤色と青色のガラスがはめ込まれています。これは船の意匠であろうと思いますが、教会の使命が神様の導きに従うことであること、また教会は「ノアの方舟」のように救いの砦であることを表すものだと思います。まさに私たちは天のふるさとを目指して大海原を走る船であります。平穏な日々ばかりではありません

ん。大波や、暴風雨の吹くときもあります。目的地ははつきりしていますが、どのような経路を辿るかさっぱりわかりません。ただ主のみ手に導かれて進む以外にありません。

こうして振り返ってみると、今に至るまで神様は常に進む道を備え、わざを進めてくださいました。伊規須師はあるところで「神の道。前には見えないが、うしろにはハッキリ」と語っています。まさに言葉通り、神様の道を辿ることができず。また、これから先のことはまったく見えません。しかし、主を信じて目の前の一步を従って行くのみです。伊規須師の奥様であり、頼もしい助力者であった泰子師が病に倒れ、闘病生活と牧会伝道の重荷を負いつつ、尽力してこられました。二〇〇七年二月十三日泰子師が召されたのち、次第にご自身も体力的に弱ってこられて、遂にドクターストップならぬ神様からストップがかかったのです。

長い航海をする船は各地の港に入り休息をとり、物資の補給をします。そのように、今しばらく、「戸畑教会丸」は新しい旅立ちに備えて休息します。詩篇を読みますと、時折、「セラ」と記されています。これは「休止」の意味だそうです。詩篇は歌われたものだから、休止符が入っているのでしょうか。「休止」することは信仰的にも大切な時間です。出発

がいつであるか、私たちにはわかりませんが、主はご存知です。その合図が出されるまで、皆さんと共に祈りつつ待ち望みたいとおもいます。ベテランの航海士である主は、「住むべき町に行き着くまで、まっすぐな道」に導いて下さいます。



あかし

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

一 まことのはじめ(あじめ?)

(ゴオー—ツ)

私 主よ、いま「はじめ」とおっしゃいましたか。

主 私はそう言ったのだが、お前達にはそう聞こえなかった
のであろう。まことのはじめ(の一瞬)には、音も光も、
時間もないからだ。

私 分かりました……。主のお言葉はまことであつて、プラ
スもマイナスもできませんが、我々の耳に聞こえる以前
に、すでに大きな広がり(バック)がある事を知りました。

二 天国行高速(道路)

エノク氏が聖書に登場したのは、ずいぶん昔のようだが、
ホラあそこに見えるのは彼の後ろ姿で、「おいで、おいで」
と手招きしているのではないか。このあたり一帯は、道なき
原野だが、あそこには道があるに違いない。大きく方向を
誤らないように注意しよう。

高規格道路では、五ミリの凹凸が問題にされるそうだが、
この天国道は完全なバリアフリー、彼エノクが天に移され
たことを、本人も周囲もまったく感じなかったという！
ここで、彼の前半生が問題にされていないことに注目。

主が甘いのではなく、御宝血ゆえに憐れまれたのだ。我々
に残された時間は少ない、急ごう。「信仰の戦いを立派に
戦い抜いて、永遠の命を獲得せよ」と、勧められている。
矮小(わいしょう)人生だけは送りたくない。主の形に尊く
造られながら、ケモノ同然の生き方をするなら、主を汚す
ことになる。

三 存在の確かさ

主は宣告された、「私はあつてある者」と。つまり、万物
をあらゆる根源者ということである。さらに、アブラハ
ムの時も、またイサクの時も、変わらぬ(永遠)不変の存在
者であると。

この方のお言葉が、如何に力強いものであるか！ヨハネ
十四章十九節に、「我、生くれば、汝らも生くべし」とあり、
我々の命は主の命と直結され、全ての指標は同期している
というのだ！

このお言葉が宣告・発動される時、命の力は満ち、体は

たちまち平衡を回復し、心は平安を保つ。私はこの夏、激戦の夜々にどれだけ叫んだことか！「ありてある方！」「我生くれば、汝らも生くべし」と。まさに打てば響く、命だった。

ここで、実験体得について学習。A、B、Cという信仰？があつて、どれを選ぼうかと悩む人が多い。しかし、私は順序が逆だと思ふ。どれを信じるかではなく、コレを信じることによつてその実在を知り、確かさを体験するものだと思う。

四 おはなし好き

神様に対して、何と馴れ馴れしい口のきき方！と思われ、るかもしれない。しかし、私にとっては親愛なるパパだ。出エジプト記二九章では、「お前と会いたい。話がしたい」と、抱きしめてくださった。

またエレミヤ書三三章では、心挫けているであろう預言者(エレミヤ)に向つて、繰り返し呼び掛けられた。対話のない事がどれほど苦しいことか、主ご自身がよくご存じで、これを破つてくださったのだ。主の呼び声を聞く時、生きる力が湧いてくる。私達を閉じ込めようとする力は、巧妙・執拗かつ強靱！例えば、快適なホームの一角が、たち

まち牢獄に変わる事もあれば、逆に、鉄格子や鉄鎖がバラリと抜け落ちることもある(使徒行伝十二章)。

五 あせり祈る

主のお言葉は永遠であるが、天地は過ぎ去つて帰らない(マタイ二四章)。国際会議は踊り、地球(世界)の苦悩は深まっていくが、人の思いを超えた経過を辿つて、人類史は過ぎ去つて行く。わずかに許された掛け替えのないこの時代に生を受け、福音を委ねられた者として、狂い祈るほかに何ができましようか？

① この諸年の間に、主の業を生き働かせ給え

② この諸年の間に、これを現わし給え

④ 怒る時にも、憐れみを思い起こしていただきたい

(ハバクク書三章)

焦りは募り、心は騒ぐ。しかし、主を待つほかない。ただ、憐れみを乞うのみ。この身を切り裂いても、何になるう。

六 ゆだねきる

真に頼りがいがあるかないか、確かめられれば安心だが、ウソ・イツワリの満ちた世で真実を見出すのは難しい。た

だ確実なのは、聖徒らが生涯をかけた証言（あかし）であろう。

① 高齢アブラハムは行く先を知らずに主に従い、選民の始祖となった。

② 出エジプトでの「主がモーセに命じられた通り」というお言葉とその報い

③ 列王記に記されたエリヤの絶対服従と主の御計画、掛け替えのない彼の使命

ある人々は、「今の時代に絶対服従なんて」と思われるかもしれないが、絶対服従に対する絶対祝福の確かさこそ、時代を越えて学ぶべきルールであり、この方こそ「頼り」そのものである。

聖徒パウロは自らが委ね切つて生き、その方に後事を託した。私もこの夏、苦学して主を知った。よく「大船に乗ったように」と言うが、この不沈巨大船に委ねれば心残りはない。この船こそ、人を天まで導く主（ことば）そのものである。

七 祈禱飛行中

ヘブル書十一章に記された信仰義人たちの列伝は、まばゆい！主から栄光の冠を受けることは、何物にも代えがた

い喜びである。

「彼らは信仰を抱いて死んだ」共通していることは、主の約束を堅く信じて、まだ見ていないにもかかわらず、すでに（信仰によって）見ていたことである。

軍艦が巨大砲弾を打ち合う時、相手艦の周辺に水柱を見らるまでに数十秒かかることがある。信仰義人たちは、（祈りの弾丸の飛行をしている）この時間を前倒しして水柱を見ていたわけである。将来の何かを言い当てる、いわゆる「予言」とは違い、真実な全権者を信頼して、「この方の確かなお約束だから、すでになつたも同然」、と見ていたのである。彼らは自分の生涯が如何に短いか、どこから来てどこへ行くのか、ハッキリしていた。

そう告白することは、空虚に生きるのではなく、むしろ、主から喜ばれる天への道であった。出自を告白できる幸い！

八 遺説

万感を込めて

主のみ名はほむべきかな

ほかに 言うことなし

献身修養生活を顧みて

隈 上 望 都 (大濠)

主の御愛と恵みにより、二〇一〇年七月より直接献身に率い出され、現在で九ヶ月が過ぎようとしています。また今春からは、神戸市にある関西聖書神学校にて、主の新たな訓練を受けようとしております。ここに至る迄、実に様々な中を通りましたが、その全てが、神様の深い深い御取り計らいの内にあつたと、日々感謝に堪えません。

この度、七月の献身式から現在に至るまでの自身の証しを通して、もう一度、主が私にして下さった御取り扱いを振り返り、その恵みをいよいよ深く味わいたいという思いが与えられました。献身式や若家族会でさせて戴いた証しを、本誌の為に再校し、時系列で掲載致します。

これから益々、様々な中に置かれる事と思いますが、その中であつて、「切り出された岩と掘り出された穴」とを常に思いみて、主が私にして下さった多くの事に感謝しつつ歩み行く日々を送りたいと願って居ります。栄光在主。

(二〇一一年三月)

一粒の麦 (二〇一〇年七月十一日 献身式)

「まず神の国とその義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」

(マタイ六・三三)

二〇〇四年四月十八日、この御言の通りの恵に、言い尽くせぬ感謝と喜びとをもって、私は受洗に与りました。

牧師の家庭に生まれ、それから来る様々な呪縛から解放されたいと、あらゆる道へ逃亡を試みたものの、全てが尽く鎖され、完全に行き詰った私を、主は不思議な御業によつて福岡大濠公園教会に導かれました。

聖日礼拝や各集会に近づく中で、「主の他に私の帰る場所はない」との確信を持ち、主の前に全面降伏し、私の信仰生活が始まりました。

しかし、当初の喜びや感動はいつの間にか薄れ、仕事や日常に追われる中で私が神様から離れていくのに、さほど長い時間は必要ありませんでした。

仕事が忙しい、疲れている、他に休みもないし……、様々

な理由をつけては、教会から遠のく日々が続きました。

教会を離れ、また主を離れ、その後ろめたさから、なお一層帰るべき場所に帰れなくなっていた私は、その後ろめたさ故に祈る事も、また御言に縋る事も出来ず、いつしか人を頼みとし、また肉の欲に心囚われた生活を送り、気付けば負う筈のない大きな負債を抱える身となっていました。

自分自身ではどうする事も出来ない状況に置かれても、なお「主を離れた報いだ」と、自身を責め、主を求める事が出来ない日々が続きました。

しかし日に日に増して来る自分の犯した罪の重さに押し潰されそうで、辛くて苦しくて、ある日遂に、私は主に祈りました。

「神様、どうぞ、もうこの罪深い者を見捨てて下さい。あなたのものである筈なのに、持ち主の許へ帰る事も出来ません。あなたの御心に叶う者になる事も出来ません。お従いしたいと思った筈なのに、こんなに中途半端でどうしようもない私を、どうぞもう、御心に留めたりしないでください。あなたに見放されれば、どんなに落ちぶれても、神様に捨てられたのだからこうなって当然だと思える。私の心に神様が居なければ、これ程罪悪感に苛まれることも、こんな良心の呵責に

悩む事も、葛藤する事もなくなる。だから神様、どうかもう、私を救うことを諦めて下さい。」

実に愚かですが、真剣な祈りと願いでした。

思えばいつの日からか、「徹底的に私に従え」と神様に迫られている気がしていました。しかし、自分がその様な者に成り得る筈もない、と長い間それに気付かない振りをしていました。神様が望む様な人間にはなれない。ならば、いつそ神様が、「期待しても仕方がない」と思う様な人間になつてしまおう、そう思っていました。

しかしその様な願いと祈りに対して、神様はとんでもない計画をもって応えられました。数々の問題を通して、またしても私を教会での生活に引き戻し、和義先生、文子先生また家族を通して、問題解決への道を示して下さいました。

見捨てて下さい、とお願いした筈だったのに、神様に一番近い所に強制送還され、御心に留めないで下さいと祈った筈だったのに、完全に神様の監視下に置かれました。

「わたしたちはどう祈つたらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」(ローマ八・二六)

との御言通り、私の心奥底にある言葉にならないうめきに、主がお応え下さった瞬間でした。

その時初めて、私は「主の御心が何であるかを知りたい」と願う様になりました。教会での生活が始まった事により、礼拝を始めとする各集會に近付く事を許され、再び私の信仰生活が始まりました。

そんなある日の聖日礼拝で、ルカによる福音書の十九章が引かれました。イエス様がエルサレムに入る際、弟子達にロバの子を連れて来させる有名な箇所です。その中の「もし誰かが『なぜ解くのか』と問うたら、『主がお入り用なのです』と、そう言いなさい」(三二の一節)いつしか気付けば、この御言が頭の中をグルグル廻る様になりました。

「主がお入り用なのです、主がお入り用なのです……。」
神様はこの御言をもって、尽く私に迫られました。「主が私を求めておられる」、そう気付きながらも、この様に罪深く、主に背き続けてきた人間が、どうして主にお仕え出来るだろうか。またどこかで投げ出し、主を失望させるのではないか、その様な葛藤の中で眠れぬ日々を過し、またより真剣に祈ることを求められました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなした。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ」(イザヤ四三・一)
「あなたはわたしに従ってきなさい」(ヨハネ二一・二二)
「わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」

(イザヤ四三・十三)

あらゆる御言をもってその御計画を現され、圧倒的な力で率い出そうとされる主の御業の前に、私にはもう抗う術はありませんでした。

二〇一〇年四月十一日

「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあらうであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすればいのちの冠をあたえよう」(ヨハネの黙示録二・十)

伝道集會での御言と、和義先生が献身に導かれた際のメッセージを聞き、身体の中の全てを驚掴みにされ、それ等を引っ張り出して捨てられた後の空の器から、止めどなく溢れてきた涙で顔をグシャグシャにしたまま、先生の許へ行き、与えられた思いを告げました。「献身したいです」と。

それからの二ヶ月、この御言の通りの苦難が待ち受けていました。様々な試みの中で、徹底的に自分の弱さを知ることとなり、献身したいと言った事を何度も後悔しました。

「こんなに弱い者が、本当に神様にお仕え出来るのだろうか？出来ないのなら、早目に、やっぱり止めますと言っておいた方が良くはないだろうか？ああ、何であんな事を言ってしまったのだろう……。」その様な思いが錯綜する中で、切に主を求め、主に祈り、主の御旨を訊ね、与えられた献身の思いが本当に御心に叶う事であるのかを問いました。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ十二・二四)

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ十六・三三)

地に落ちた麦粒の私が、今まさに、生きたまま腐って土に帰ろうとしているところに、止めを刺された気分でした。

主の前に遠の昔に死んでいるべき者が、何の未練か何度も蘇り、何とか生きてやろうと往生際悪くうごめいていましたが、神様に「勇気を出して死ね」と、こうもはっきり言われて

は、他にする事がありません。

主に背き続け、多くの罪を犯し、キリストを十字架につけた、本当に罪人の頭であるこの私。救われる筈のない、汚れきってどうしようもない、それでもなお、主に「赦してください」とすら願えなかったこの私を、主がお入り用であるならば、全てを捨てて、「今」お従いしようと思うに至りました。

「『わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。』それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ喜んで自分の弱さを誇ろう」(第二コリント十二・九)

神様はご自身の栄光を表すために、誰よりも弱い私を召して下さいました。私は弱い。しかし、その弱さを用いて御自身を現そうとされている主のために、今、私は、勇気を出して死にます。

この小さな麦粒を、主がどの様な実りに変えられるのか、その御計画のために全てを主にお返しし、全てを主にお委ねし、大いなる期待をもって、待ち望みたいと心から思います。

主に従い行かん（二〇一〇年十月 若家族会）

七月十一日に献身式をして戴き、もう間もなくで四ヶ月が経とうとしています。その後送る事となった修養生活の中で、私は御言を通し、『神様の前に死ぬ』という事を度々迫られました。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（ヨハネ十二・二四）

私が和義先生に献身の思いを告白したのが、四月十一日。それに伴い、当時在籍していた職場に対し、六月末に退職する旨を伝えたのが四月の末。それから私は二ヶ月程、仕事と教会献身の二足のわらじを履く事となりました。気持ちの上では献身に対して一直線に歩む覚悟をしたつもりでしたが、上司や取引先からの誘いを断り切れず、飲み場に行く事になってしまったり、仕事の疲れから、備えの日である土曜日の指定時間に起きる事が出来ず寝坊してしまったり、それはもう和義先生をヒヤヒヤさせ、文子先生を激怒させ、波乱の

日々であった事を思い出します。

よく映画等で、「俗世に居ては罪を犯し続けてしまうから、ここに置いてください。」と修道院の門を叩く女性の姿を見ますが、あの気持ちを実によく理解出来ました。「早く退職して修養一本の生活がしたい。そうすればこんな思いをしなくて済むのに……。」等と安直な事を度々考えていました。

そんなある日、文子先生や私、また大濠の若い信徒の方々と食事をする機会がありました。その中で文子先生が、「献身すると言ったのに、その直後にお酒飲んで帰ってくるし、牧師が起きる様にと言った時間には起きてこないし、私絶対もつちゃん（私のこと）の献身は信じられないと思っていたのよ。」と、その信徒の方々の前で仰ったのです。それを聞いたある方が、「それはもう、献身者というより人間として問題があるよね。」と笑いながらも痛烈な一言を発せられました。「ムグツ!!」と思わず言葉に詰まりましたが、成程その通りだと思わざるを得なかった訳です。

私が普段から信仰に篤く、社会的にも立派で、「あなたが献身しなくて誰が献身するのよ!」と言われる様な人物であったならば、さぞかしスムーズに事が運んだのでしょうか。如何せん前述の通りの有様でありましたから、献身した

いと言ったものの、「私が献身したところで果たしてどうなるのだろう……。誰が喜ぶのだろう……。」と少なからず自信を無くしていたところでありました。その自信喪失中の所へ『人間の駄目』と止めを刺され、いよいよ落ち込んだ訳であります。「ちよつとこの献身、考え直した方が良いのかもしれない……。」と思っていたところに与えられたのが、先程の御言でした。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ十二・一二四)

「ああ、そうだった。」目が覚める思いでした。私が出来る事は何もない。しかしその出来ない私が一切を捨てて主に御従いする時、主が如何様にも私を変えてくださる。私はその主の御業を現す為に献身するのであって、自分が何も出来ない等という悩みはとんだ見当違いだ。神様はわざわざ『人間の駄目』な私を用いてその御業の大きさを現そうとして下さっているのだから、私は自信を持って開き直って、主の前に死んでおけば良いのだ。そう思うに至りました。

その後、仕事を辞め、本格的に修養生活に入っていく訳で

すが、開き直って死んだはずの私は、それはもう度々生き返る事となります。

その最たる出来事が、九月の中頃にありました。その月で献身二ヶ月を迎えるという事で、その間の主の御取り扱いを大濠の伝道集会で証しする様にと和義先生からお話を戴いたのです。その事を非常に喜んだ私は、さて何を話そうかとそれはもうワクワクしてその日を待っていました。というのも、八幡前田教会での修養生活は、私にとつて非常に恵みに富んだ、充実した日々であるからです。勿論、それまでの生活とは一八〇度と言つていい程違いますから、戸惑う事も多々ありました。しかしその中で正面切つて主を求める事が許されています。問題や悩みの中に置かれても、常にそれが失望に終わる事がない、喜びと希望に満ちた毎日を送る恵みに与っています。しかしその時の私は、その出来事の中のどれを語ろうか、という事にばかり心が捕らわれていました。その結果、私は伝道集会当日、一切語ることが出来ませんでした。こんな出来事があつた、あんな良い事が起きた、だから私はそれを語る事が出来ると思っていました。しかし私の口から出てきたのは、その恵みの結果である出来事の羅列だけで、そこに主がどの様に働いて下さったか、またどの様な思いで私を御取り扱い下さったかを証しするに至りませんでした。

しかし神様は、証しとしては大失敗の悲惨なこの出来事すら、自分が主に拠らなければ何一つ語ることの出来ないものである事、また、真の恵みとは何であるのかという事を私に教える、正に『恵みの時』として下さったのです。

「まず神の国とその義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六・三三)との御言通り、私がまず求めるべきものは、神様であつて、目に見える結果や出来事は添えて与えられる付録にしか過ぎません。どの様な恵みも、そこに働かれる本体である神様を認めないならば、それは実に空しいものです。ですから私は、どの様な中にあつても、自分の思いや知識、力……まあそもそも無い者であります、それ等の全てを捨て、その付録である出来事の中に働いて下さる神様の愛、業、力、思い、計画、それ等を知ろうと願うものとならなければなりません。神様は御言を通してその事をよくよく私に論じて下さいました。

始まって間もない、まだ歩きたてのひよこの様な献身生活ですが、そのたどたどしい歩みの中にも常に主が働いて下さっている事を体感出来る日々を送らせて戴いています。

これからも主の前に常に死んだ者となり、一切を主にお返しし、全てを明渡して歩むものになりたい。その時に主は、私でなくては現すことの出来ない大きな御業を成してくださいに違いありません。大いに期待しつつ進ませて戴こうと思ひます。

感謝が満ちあふれて神の栄光となる

(二〇二一年一月 若家族会)

この献身修養生活も、早いもので、この一月を以つて満半年を迎えました。献身告白当初は、自分の余りに神様に従えない心の大きさに、献身した事自体を何度も後悔する様な者でしたが、それが今に至るまで守られ、今尚こうして皆様の前で証し出来る事は、ひとえに主の恵みと憐みに拠る他ありません。

さて私が献身する際に、献身の注意事項として戒められた事と言いますか、これが献身の基本の「基」であると言われ

て出された事があります。それは、

「とにかく聖書を読み、祈りの時を持つ事。」もう一つは「献身は神様に一切を捧げる事であるのだから、この為に献身する、とか献身してこの事をしたいと言う様な事は一切無し。献身は神様への白紙委任であるべきで、神様がこれをしなさいと示される事をするのみの、言わばその日暮らしの生活をする事。」という二点です。

言われた当初は、「ああ、そうだその通り。勿論その様にしますとも！分かってます。大丈夫です。」と、自信満々に思っていたのですが、いざ修養生活が始まってからの、委ね切れない自分自身の我の強さにはどれ程失望したか分かりません。

白紙委任とは言われても、何かこう出来る事をしたい、これなら役に立てるに違い無いから、是非やりたい、とまあ自分自身を振りかざして、あれもこれも……、と思いが上がつていた様に思います。しかし、その様な事が一つ、また一つと道を閉ざされる中で、一体私は何のために献身したのだろうか……。と目的を求めて考え込む事もしばしばでした。

それでも、神様の臨在に近づく事によって与えられる力とは正にこれであつたな、と今になって思うのですが、聖日礼拝、週日の各集会に出席し、神様をより近くに感じ、御言を

戴く時、やはり私の心はいつも喜びに満たされました。

「わが恵み汝に足れり」(第二コリント十二・九)との御言通り、手持無沙汰である様に思っていた日常も、「これで良い。」と思える様になり、実に幸いな日々を送る事を許されました。

やがて、

「あなたの顔を見ると元気になるわ。有難う。」

「日に日に穏やかな、良いお顔になっていきますね。」

「毎日が新鮮で、楽しくて仕方無いってお顔ね。」

と、嬉しいお声を掛けて戴く様になりました。それがこの冬に入ってからの方に記憶しています。その時その時は、まあ何とも図々しい事に、単純に容姿を誉められた位に思い、「いやあ、そんな事ないですよ。」と変な謙遜をしていたのですが、ある時をきっかけに、「ああ、そうか。これこそが、神様の恵みであり、御業であるのだ。」と気付きました。

思えば、神様から離れたくて必死に様々な罪を犯し、言ってもそもそものが弱く罪深い者でありますから、神様を恐れない生活をする内に、自然と低きに流され、また気付けば心身共にボロボロになり、酷い鬱状態で福岡に來た私。當時を

知る人は「土気色の顔に、死んだ目をしていた。」等と言いますが、正にその様な状態であった私が、「顔を見ると元気になる。」と言われるのは、只々、神様の御業が私に及んでいると言う他ありません。

私が少しばかり出来ると思っていた、何とも知れない何かしかの事を用いるより、遙に大きな事を神様が為さったと知る時でした。「無から有を呼び出される神」(ローマ四・十七)とは誠にこの方であつたと思わざるを得ません。実に神様は、この私の存在そのものを、御自身の栄光を現す為に用いて下さったのだ。私が、今ここに在るといふ事そのものが、神様が今も生きて働いて下さっているといふ事の証しであるのだ、と大きな喜びに包まれたものです。

しかしその様に、神様の御栄光に照らされ、嬉しくて楽しくて喜びに満たされた日々は、ある日をもって暗転します。神様のその光のすぐ近くで、日々煌々と照らされた私は、ある時その光に照らされた自分の後ろに、大きな影がある事に気付きます。それは他でも無い、自分自身の罪の数々でした。

昨年の末頃でしたでしょうか。人は死ぬ前には、自身の一

生を走馬灯の様に見ると言いますが、私はある日突然、自身は今迄犯した罪を、それはもうまざまざと心の内に見る事となつたのです。「あの時、あの人にこんな事を言った。あんな事をしてしまった。きつとあれはあの人をととても傷つけたに違いない。ああ、そう言えばあんな事もこんな事も……。」と実に具体的に思い出されて仕方無いのです。

私の罪は全てが赦された。キリストの血潮による救いは既に完成して全きものである。そう知り、また信じていました。信じて受洗に与り、その大いなる御愛の前に全てを捧げる他無い、と献身しました。しかし、私のこの感情はなんでしょう。

「私の中には、まだ神様に赦されていない罪があるのではないか？」という、不安と恐れでした。

祈っても祈っても拭われない思い、聖書を読んでも読んでも、御言が一番大切な処に沁み込んでいかない感覚。「私は、神様を信じていないのではないだろうか？」との思いまで表れ、焦りと半ば失望にも似た思いの中に在りました。

「だが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは死んで、否、よみがえって、神の右に座

し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。だが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。」とローマ人への手紙の八章にあります。神の選ばれた者を訴え、罪に定め、キリストの愛から遠ざけているのは、他でもない自分自身であると、嫌と言う程知りました。

また、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」(使徒行伝十・十五)との御言に対して、自分自身を誰より清くないと思っているのは、私であるとも知りました。

しかしそれ等の思いから脱する事が出来ない。次第に私は「神様が私を何か目に見える試みの中に置いて下されば良いのに……。」と思う様になりました。何か、日常の中で具体的な問題があれば、それについて祈る中で神様に近付き、答えが出るかもしれない。何とも苦し紛れとしか言い様のない考えが度々頭を過ぎりました。

けれども、神様は私をその様な具体的な試みに遭わせる事をせず、それどころか、尚一層目に見える恵みの中に置かれました。それは神様が「今はその様な苦しみに遭わなくても良いよ。この恵みの中で私を求め、私に会い、私を知りなさい。」と勧めて下さったに他なりません。

愛なる方が、わざわざ苦しみを遠ざけて下さっているのに、

「いえ、それではいけません。私は苦しみに遭うべきなのです!」と言っているに等しかった自分の傲慢さをそこで知りました。しかしそれではどうしたら良いでしょうか?もう祈るより他ありません。

そして迎えた二〇一一年の新年聖会。しかも今年は大濠と前田の計十八回。何としてもここで御言を戴き、この戦いに勝利したい!!この年程新年聖会を待った年はありませんでした。

気合十分で臨んだ聖会、私は思わぬ処で心を捕らわれました。

「主は遠くから彼に現れた。わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。」(エレミヤ三一・二三)

気が抜ける思いでした。力強い御言により、バーンと敵を倒す様に強められるのではなく、もう一度神様の原点を見ました。気がしました。

「生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わ

たしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」(イザヤ四六・三、四)

と約束してくださる主が、限りなき愛をもって、と仰る。またその愛ゆえに絶えず真実をつくしてきた、とも。

成程私は、自分自身で勝手に疑う事は多々あれど、その中で神様ご自身に裏切られた事等、只の一度も無かったではないか。それどころか神様は、只ひたすらに恵み、豊かな平安の中に置こうと、常にして下さっていただけではないか。あれが愛の故でなければ一体何だろうか。健康を与え、私自身をその御栄光を現す器とし、試みを遠ざけ、ここまで持ち運んで下さった。神様はいつも真実を尽くしてくださっているのに、それを疑い、私の罪はまだ赦されていない、等と言うのは、私は幸せの中では神様に会えないから、試みを下さいと言ったあの傲慢さにも勝る愚行ではないかとようやく気付くに至りました。

私は神様の限り無い御愛を計り知る事は出来ません。御子を賜わる程の、と言われても、子供も居ないし、居たつてきつと十字架につけられない。しかし、その御愛の一端から来

る恵みがこれ程であるならば、限らない愛より下そうとして居られる神様の御計画、また恵みは一体どれ程であるでしょうか。到底知り得る事の出来ないその御愛、それ故に尽くされた真実に既にこれ程与って居るのだから、感謝して信じこすすれ、疑う隙など端から少しも無かったのです。

私は自分がどれ程信仰の無い者であるかを知りました。御子の霊に拠らなくては、聖霊に拠るのでなければ、何の力も無い者です。しかし、その御霊の声を信じて歩み出す時、その足に力を与えてくださる主が共に居て下さることもまた知っています。その力は、愛なる方が、ご自身の義を全うするために与えると既にお約束下さっているものです。

私は生涯この愛を信じ抜く者でありたい。それにより更なる恵みに与り、より主を知る者となりたい。

新しい年、「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る。」(イザヤ四三・十九)と仰る主が、私にどの様な御計画を抱いていて下さるのか、およそ考えも及びません。しかし愛なる方が私に与えるのは、決して災いでは無いとの確信があります。例えば目に見える状況がどの様であっても、その中で神様に会い、神様を知り、またその御旨を求め、いつも主を喜ぶ者でありたいと願います。

そのために今日も、御霊の細き御声に、即座に正しくお応え出来る様に、いつも心を主に向ける者でありたいと思いません。

「わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。」(エレミヤ二九・十一)

聖旨に従わん(二〇一一年二月若家族会)

八幡前田教会では、こうして第三週にこの若家族会が持たれていますが、大濠公園教会では、第一週に『若枝会』という名の部会が持たれています。始めた当初は、青年会の延長のような形で持たれていたこの部会も、年を追う毎に、皆青年と呼ぶには少々難ある年頃になり『若枝会』とその名を変えて今に至っています。今現在、毎月の部会に残る方は七、八名ですが、その子供達を加えると総数十五名程にもなります。若き信徒の方々との交わりに加え、この大所帯の食事を作

るために、私は第一主日に備えて大濠公園教会に遣わして戴きます。

今月も六日の若枝会のために、福岡へ行って参りました。いつもと変わらず、和義先生や文子先生の御指示の下、御用に当らせて戴く訳ですが、何故か今回は、何をしても何かを忘れるのです。

「ポットにお湯を入れておいてね。」と言われては忘れ、
「これをあの人に渡しておいてね。」と言われては忘れ、
あれも忘れこれも忘れ、もうどうしようもないのです。

まあ、そもそもが、どこか抜けている私ですので、「また忘れてるわよ、何してんの!？」と、最初はいつもの様に注意されていたのですが、それがもう余りにも続くので、一体これは何事か、という話になった訳です。

しかし実は、私には間違はなくこれが理由であろうという心当たりがありました。それは、十二日に控えていた神学校の入学試験への不安です。

前回証しさせて戴いた様に、一月をもつてこの献身修養生活も半年が過ぎました。その修養生活に入る際から、金生先生や栄子先生が行かれた、神戸にある関西聖書神学校に行つ

ではどうか、というお話は戴いていました。ですから、昨日今日降って沸いた話では勿論無く、入試に必要であろう勉強……といいますが、まあ主には聖書を読むと言う事と少しの英語もあればいい、という位のものでしたが、それに対する心備えはしていたつもりでした。

その神学校についての事が、何ヶ月も先の遠くの方で見えていた時は、只々嬉しくて、楽しみで、一体どんなところでどんな生活をして、どんな学びが出来るのだろうか、と能天気喜んでいたのですが、いざ願書を出し、入学試験が間近になってくると、やはり不安なのです。勉強はこれで十分なのか？ 一体どんな試験なのか？ どれ位の受験者が来るのか？ そもそも、この方向音痴の私は、無事神戸に辿り着けるのか？ という、試験そのものに対する不安は勿論でしたが、それ以上に私の中で大きかった不安は、

「私は、この神学校の入学試験を、神様に示された事として、しっかりと握る事が出来ているだろうか？」という事でした。献身する際に神学校に行くように言われたから、金生先生や栄子先生が行った学校だから、行けと言われたから、だから行くものだ、と心のどこかで思っていた自分に気付かされました。

受験を数日後に控えてそんな思いを与えられた私は非常に焦りました。不安な上に焦りまで乗っかって、もう訳が分かりません。何を言われても、心ここにあらずで、右から左、左から右へと言葉がスルスルと抜けていくのです。

その様な状態で迎えた十日の木曜日。十二日の試験の為に、前日である十一日に八幡を出発し、神学校の女子寮に一泊する予定にして居た私は、木曜会の御用をされる和義先生の車で八幡へ戻って参りました。木曜会の御用が終わり、帰られる間に、先生がこの受験の為に祈りして下さいました。続けて私も祈りました。その祈りの中で与えられた御言が創世記の二四章の御言でした。

「この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません」(創世記二四・五十)

「この事は主から出たことですから……」

自分で祈ってびっくりしました。どう祈ろうか等勿論考えていませんでしたが、口をついて出た御言がこれだったので。しかし祈りを嘯み締めた時に、「ああ、本当にそうだ、その通りだ。」と心から思いました。

そもそも、この献身は主から出た事であると、一番知っていたのは私自身です。以前は、何とかして洗礼を受けずに済ませて、どうにかして神様から逃げ切ろう。と思っていた私、が、神様の壮大な御計画の内に献身へと引つ張り出され、また何度も挫けそうになる中で、一つ一つ必要な力を与えられ、こうして今に至るまで導かれた。その中に自分の力等、ほんの少しも働く余地は無かった。その神様が、この受験を備えて下さったのだから、まず、私はこの事を感謝して、精一杯受けさせてもらえば良い。

これは、神学校に行く、行かない、受験に合格する、しない、の問題ではない。まず私が、全ての事の前に、何を置き、何を第一とし、何に拠り頼み、何を信じるか。与えられた問題を神様と自分の間に置き、神様ときちんと向き合っているか、それを問われているのだ、と確信しました。

「この事は主から出たことです」

この事をも主が導いて下さるのだから、信じて、感謝して、喜んで、この受験に望もう。試験出発前日ギリギリで、ようやく心が定まりました。

そして迎えた受験前日。小高い丘の一角に門を構えるその寮は、昭和の香りをプンプンさせる造りで、暖房設備は石油ストーブ。暦は春を告げるも、今尚吹きつける冷たい風が窓を激しく揺らし、寮内は何故か皆ダウンジャケット着用で、私の携帯のソフトバンクは圏外であるけれど、しかしその中で、寮生の方々と、とても楽しい、良き交わりの時を持たせて戴きました。

ささやかですが、と歓迎のお茶会を開いて、手作りのケーキやクッキーでもてなして戴く中、皆さんの母教会、神学校や寮生活のお話をお聞きする機会が与えられたのもとても幸いでした。

しかし、今回何より私が恵まれたのは、翌日の早天祈祷会でした。三月に卒業を控えた三年生の女子学生が御言を取り次いで下さり、その後、導かれるまま次々に学生が祈っているのです。現在、この関西聖書神学校は、創立以来、最少の学生数だという事ですが、それでも二十数名の学生が立て続けに祈る姿は、これまで私が遭遇する事のないものでした。

そして、その学生達が、先ず十字架を仰ぎ、その砕けた悔いた心を主の前に捧げ、また、何とか主に御仕えする器として整えられたいと切に願うその祈りは私の心を非常に打つものでした。

「今私は、主の御旨を正しく理解出来ているでしょうか？正しく御仕えする事が出来ているでしょうか？もし出来ていないのであれば、どうぞ憐れんで、あなたの御旨を悟る者として下さい。あなたに喜ばれる者と造り変えて下さい。」

ポロポロと涙を流しながら、心を注ぎ出すその様は、私がこの献身修養生活で何度も体験したものと同じでした。「ああ、こうやって砕かれ、悔い改め、潔められていくんだなあ……。」と感じると同時に、私が八幡前田教会の修養生活で、いかに恵まれた日々を送らせて戴いているのかをもう一度知る事が出来ました。

それは、エアコン付きの部屋で、ダウンジャケットを着なくても大丈夫、という目に見える恵みは勿論ですが、何より、神様が私にして下さっている訓練がどれほど素晴らしいものかを明らかにされた事に他なりません。その訓練の場所が神学校だろうが、教会の修養生活の中だろうが、神様は求める者を等しくお取り扱いくださるのだと知る事が出来ました。

考えてみれば、出発前日まで、どこかこう、〃神学校に行く〃という事にこだわり過ぎて、見失う物が多くあった様に思います。全てを主にお委ねし、一番良い事を神様が行ってくださる、と信じた時、神様はご自身の真実さを現すために、素晴らしい事を教えてくださったな、と感謝に堪えませ

ん。

私に最も良い場所は、神様が備えてくださるのだから、一切を明け渡してお従いしよう。そう思うことが出来ました。

そして先日、無事合格通知を受け取りました。素直に嬉しい、ほっとした、という思いと同時に、合格通知が届いたから行くのではない。この事もまた、主の前に差し出して、神様の手によって進めていただかなくてはならない、という思いを与えていただきました。

これからの日々も、神様は様々な事を通して、私を訓練して下さることでしよう。しかしそれは、ただ寝て待つていれば来る様なものではない。起こされる様々な問題、その全てを、いつも神様の前に置き、神様の御旨を訊ね求め、またそれに忠実に従って行動するときに得させていただく恵みであると知りました。

これからの私の献身の生涯が、主の御旨を正しく知り、また正しく御仕えするものである様に。まず全ての事を主に明け渡し、主の御取り計らいを求めるものである様に。日々の祈りに加えて戴ければ幸いです。

都を待ち望みつつ（二〇二一年三月若家族会）

遂にこの献身修養生活も最後の月となりました。七月に献身式をして戴き、ここ八幡前田教会での修養生活に入った訳ですが、それ以前に、和義先生へ献身の思いを告白したのが四月十一日でありましたから、それから考えると来月には、早一年を迎える事になります。

証しさせて戴く度に申し上げている様な気がしますが、しかし本当に自分自身、正直ここまで続くと思っておりますでした。それまでも、自分自身の人としての弱さは、よくよく理解しているつもりでしたが、それでも尚、叩けば叩くだけ出てくる弱さと埃の数々を献身修養生活において何度と無く露わにされ、それはもう何度目を背けたくなつたか分かりません。

献身前の私であれば、自身に失望し、低きに逃亡していただろう事は容易に想像出来ませんが、修養生活に於いては、その弱さを用いて様々な事を教えて下さる主を間近に体感する事を得させて戴き、万事を益と為し給う御方が、今まさに私と共に居て下さる、との喜びの内に日々を過して居ります。

また、迎えます四月一日には、神戸にあります、関西聖書神学校女子寮への入寮、また五日には同校入学式と、新しい訓練の場を備えて戴いております。

先月証し致しました通り、入学試験前にそれはもう大変なパニックぶりだった私ですが、その後無事合格通知を受け取り、さあ後は現地入するばかり……、と思いきや勿論そうはいきません。もう一度、主は私に清算すべき一つの事を示されました。

これまでの証しの中でも皆さんご承知の通り、私は牧師の家庭の第一子として地上に生を受けました。

とかく長男長女とはその能力に関わらず、両親の期待を過大に受ける事の多い存在であります。それに加えて何かと事の多い私に対し、両親、殊に母の思い入れは非常に強いものであったのではと想像します。

まず二歳前後で頭から左腕にかけて大火傷を負った事。ですから私のアルバムを見ますと、生まれて一年程はコマ送りの様に、月に何十枚というペースで写真が貼られているのですが、ある時突然急成長した私が現れます。火傷を負い、髪の毛を剃られ、薬や包帯で覆われた私の写真を撮ることが忍びなかったと言う親心からでしょう。

また母が、自身の通った音楽を志すという道を、同じく私に歩ませたいと願った事。母は音楽大学を出た後、ピアノの教師をしておりましたが、私にも音楽大学を出て、何らかの形で音楽に携わって欲しいと願っていた様です。

そして何より、牧師の家庭に、またクリスマスチャンホームに生まれた者として、同じく信仰を持ち、生涯神様に御仕えする者になって欲しいという事。

しかしそれ等を、自分自身の内に上手く消化出来ないままに成長した私は、いつしかその様な事を両親に強要された様な、また、当時の自分がいつも何か心に不満があるのは、自分達の生き方を強いて、私個人の価値観を無視した両親にあるという様な思いを抱いていました。まあ色々言ってみたところで、年頃の望都少女は反抗期だったのです。

派手に反抗期を迎えた私は、とにかく両親と神様を裏切る事から始めました。私が周りの友人の様に、日曜日に遊びに行けない、部活動も満足に出来ない、ある時は運動会にも出してもらえないなど、何かいつも周りとは違う事を否応無しに強要されるのは、両親と、また両親の信じるこのキリスト教なるものに原因があると考えたからです。

しかし、両親に背きに背き、反抗に反抗を重ね、行き着いた先は私が望んでいた、自由で楽しい生活とはかけ離れたものでした。

そして、その時私は初めて気付きました。両親が望まない事をしよう。両親に見放される様に行動しよう。そう努めて生きてきた私の原動力となっているものは、形は違えどやはりこの両親と、また両親が信じる神様であったということに。

その後、結局神様中心にしか生きる術を知らない、しかし余りに背き続けた自分を知っていましたから、中々素直に赦してください、と言えなかつた私。その私に神様は様々な事を起こし、御自身が一番近くに置く事を自らの手で進めてくださいました。

この様にして昨年の四月に献身告白、そして七月に献身式と、事は進んでいった訳ですが、私が様々な中で変えられていく様を全く知らない両親は、この献身を大変心配しました。それは実に無理もないことで、実家で共に生活をしていた時の私の暮らしぶりは、それはもう悲惨なものでしたから、あの娘がちよっと変わったくらいじゃどうにもならん、と思つたに違いありません。

ですから、七月の献身式に来てくれた母は、他の家族から「もつちゃんのお証しをすっかり聞いて、本当に変わったかどうか確かめてきて！」と、いわば調査員として送り込まれていた、というのを後から聞いて、大爆笑したことを思い出します。

しかし、献身式での私の証しを聞き、また和義先生、文子先生、教会員の方々から近況を聞く内に、本当に神様が私の内に大きく働いて下さった事を知り、喜んで帰途についた母を見て、私自身もまた、神様のなさる事の素晴らしさを味わいました。ですから、先日、神学校の合格を母に知らせた際も非常に喜んでくれました。実は、合格した事を知らせるのをすっかり忘れておりました。先月の末頃「あ、そういえば」と知らせた訳ですが、「是非引越しの手伝いや、入学式にも行かせてもらいたい。」とまで言うのです。

私をこの様に導かれたのも神様ならば、両親の心を変えて下さるのも神様なんだな、と私自身も非常に感謝でありました。

しかし、その中で私の心に一つの思いが与えられました。「私は、献身した事を喜ぶ両親を喜ぶ気持ちがあるのではないか。」という思いです。

限上家の長子として生まれ、多くの期待を寄せられている事を知りつつも、それを叶えることが出来なかったという思いから、私は両親に対して、どこかこう、いつも後ろめたい思いがありました。ですから献身する事が、それに対する罪滅ぼしの様な、「まあ今迄良い娘じゃなかったけど、これぢよつとは親孝行出来たでしょ。」といった気持ちから出たのではないか。音楽の道に進んで欲しい、という母の願いを叶えられなかった事に対する償いがこの献身によって出来た様で、少しホツとしているのではないか。

様々な思いを与え、神様は私の心の奥の奥まで探られました。

しかし私はその様な事のために献身したのでしょうか？断じて違います。実の両親ですら手に負えなかった私を、片時も見放す事なく、ボロボロになって神様の許に立ち返る力すら無くなったその時に、自ら近付いてきてくださった主の御愛の前に、一切を捧げる思いで献身したはずです。

「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今なお人の歓心を買おうとして

いるとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。」
とガラテヤ人への手紙の一章にあります。人の前にこの献身を誇ろうとする気持ち、それが全く無いか。また、

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。」(創世記十二・一)

肉の思いの一切を捨て、神様が示される事だけを行っていくか。神様は、私の従う姿勢を徹底的に問われます。

私は母にメールしました。

「この献身は両親の元からではなく、この群れからするものです。ここでもう一度、肉なる繋がりの一切を神様の前に清算し、私個人が神様の前に出る時です。今後は両親としてではなく、先に召された献身者、伝道者、信仰者の先輩としてお付き合いください。もし何かこの事への感謝などがありましたら、私ではなく、この群れの教会宛にお願いします。また今後、私の身はこの群れに帰属しますので、一切は群れの責任者である和義先生を通してお願いします。」というような内容だったと思います。

特に話し合いの必要はありません。求められているのは、

私の信仰姿勢を神様の前に明らかにする事だからです。

実家を離れ福岡に遣わされて早九年。普段の生活において両親と関わる事は殆どありませんでした。ですから今まで同様この関係を保つていても、目に見える生活に何等変化は無いのかもしれませんが。しかし神様は、だからそれを曖昧にしても良い、とは仰いませんでした。そして人の目には小さく見えるその様な思いの全てを、今、ここで清算する様に、と命じられたのです。

そしてこの命に従った時、例え肉なる繋がりはここで絶えたとしても、この先必要であれば、ゼロから新しい関係を築いてくださるのも神様である。

しかし例えそうでなくとも、私の献身生涯の全責任は神様が負って下さるのだから、一切を主にお任せしよう。そう思える信仰も与えてくださいました。

「信仰によってアブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。」とヘブル人への手紙の十一章八節にあります。先程の創世記の箇所同様、アブラハムが神様に命じられた言葉を記した箇所ですが、それぞれ今回私がこの事を通して与えられた御言葉です。しかしまた、この先の十節にある御言

「彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てられたのは、神である。」

隈上家の長子として生まれた私に、両親が期待と願い一杯でつけた名前の由来がこの箇所であります。

一切をなげうって、只神様に身一つで御従いする様に。

人に抛るのではない。肉に抛るのではない、只神様の御業を信じて待望む様に。信仰者としての両親の祈りに、主はこの様にして応えて下さいました。この事を思う時、神様の何とご真実な事か、と誠に厳肅な思いが致します。

三三年かけてこの事を人の前に明らかにするその御計画の広大さ。その御計画の内に、今日も生かされ守られ、また持運ばれている。この方が果たしてこの先、どの様な事を備えていて下さるのかと、期待で一杯です。

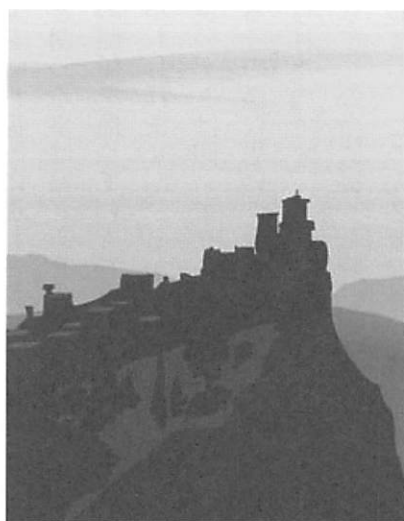
大きな新しい事が始まる来月からの歩み。しかしその全てを既に握り、万全な計画をもって備えてくださる神様が共に居て下さいます。何の不安もありません。

どうかこれからの私の献身生涯、この信仰を常に持ち続けていられる様に。

「ゆるがぬ土台の上に建てられた都」と、堅く立って動かされる事のない信仰によって歩み続ける事が出来る様に。

また、来月からの神学校での生活の全てが、神様の祝福の内にある様に。

どうぞ続けてお祈りくださいます様お願い致します。



感謝

廣田 壽(前田)

(一) 今日あるを得て

昭和二五年、大阪の地から九州に来て以来、三十数年の勤めを終え、昭和六二年六月に、無事退職することができた。絶えず共にいまして、お導きいただいた主に感謝し、常に祈りに覚え、お交わりいただいた多くの方々に、心からお礼を申し上げたい。

仕事は、数名で創業した会社であっただけに、長年ひたすら打ち込んできた。戦後の混乱期から高度成長期を経て、全国に事業展開を図り、数百名の中堅企業に成長させていた。それにつれて、八幡で十年、東京で五年、川崎へ移って二年、それからまた八幡に帰って十三年、再度東京へ三年、最後は八幡に帰って四年と、転勤を経験してきた。

その間、住居も小倉、東京、逗子、八幡、横浜と転々し、与えられた子供達は、長女が小倉、長男は東京、次女は逗子でと、それぞれ生地が異なる珍しいケースとなり、新しい土地への体験を重ねながら、成長させていただいた。

教会は、昭和二三年、大阪高石教会で求道、受洗し、その

後、前記のように九州へ来て、八幡前田教会から各地へ遣わされた思いである。東京の志村栄光教会、逗子教会、渋谷教会へと導かれ、礼拝を守らせていただき、主にあつて、多くの交わりを持つことができた。

入信以来四十年、様々な中を通されてきたが、その都度、神の憐れみと恵みにより、信仰が与えられ、奇しくも今日あるを得ていることに、唯々感謝でいっぱいである。

常に教えられているように、救われた者の身分をわきまえ、信仰の基本にかえって、「されど今日も明日も、我は進み往くべし」(ルカ一三・三三)と言われる主に、休みに入れられるその日まで、喜びと祈りと感謝をもって、お従いしていきたい。

(第一コリント十五・十)

(二) わが身はいかでか、歌わざらめや

年末に暦をめくると正月が来るように、新年には必ず新年聖会が開かれるものと、恵みに慣れて当然のように考えていなかったであろうか。ところが、昨年(昭和六二年)は新年を目前にして、牧師先生の御病氣、入院となり、聖会が開かれなかつたのである。

教会員一同、心を合わせて、主の癒しの御手を切に祈り、重苦しい中で迎えた新年であった。憐れみに富み給う神は祈

りに応え、危険な中から全く奇跡の癒しを与えてくださった。そうして、直ちに、再び尊い御用に当たっていただけのようなのである。言い尽くせぬ感謝であった。

今年は、聖会が開かれた！先生は健康を支えられ、お元気で三日間の御用に当たってくださった。昨年の事を思うと、まことに感謝に堪えないところで、皆さんと共に、この得難い時を待ち望みつつ、出席させていただいた。遠く東京、大阪から、空の便や新幹線で来られて、ホテル住いで聖会に出席された兄弟姉妹があつたことも感謝であり、御名を賛美した。主のご聖会は、聖霊のお導きにより、全体の大きな流れの中で、天地を造りこれを支配される偉大な力ある主、何でもできないことのない主が、もう一度、私達に身分を明らかにしてください。

その主に信頼する時、心騒がせない平安を与えられること。わたしに呼び求めよ、と言われる主との交わりにより、自分で力まず、事ごとに主に委ねていくこと。身も心も、立つて主に帰り、キリストの内に留まって、神の御旨に従って生きること、懇ろに導いてくださったのである。

罪赦されて、主の手の内にある喜びと平安、これは理解するだけでなく、日々の実生活の中で、不信仰にならぬよう、堅く主に信頼し、御言に従うようにと、繰り返し教えていた

だいた。

今年一年、聖霊に導かれ、信仰もって心を主に向け、見ゆるところに動かされない、パラダイスに住まわせていただく確信を与えられて、この大いなる恵みに感謝した。

三日目の夜、「万軍の主の熱心が、これをなされるのである」(イザヤ九・七)との御言を頂き、とどめを刺される思いであつた。(霊感賦五一番)

(三) 涙も恵みに報い難し

体調を崩して休んでから、この度、三年ぶりに礼拝司会の御用に当らせていただくことになった。

「神を信じ、また我を信ぜよ」(ヨハネ十四・一)と言われる主は、癒しを与え、忍耐をもつて今日まで見守ってください。つた(イザヤ三十・一八)ことを覚えさせられ、感謝した。牧師先生は長期間祈って、体調回復のチャンスを待ってください。

司会の連絡をいただいたのが土曜日の夕方。その週は、火曜日に九大病院で検診を受け、耳下腺三回目の手術の後、無事五年を経過したことから、次からは一年おきの検診にしよう。一応解放された日であり、金曜日には、厚生年金病院で検診、胃の手術の後三年になるので、これからは半年ごと

の検診でよいということになり、これもまた、一息ついた日であった。そのあまりのタイミンクの良さに驚くとともに、すべてをご存じの主に感謝せずにはおれなかった。

翌日の御聖日は、暖冬後の小雪のちらつく朝で、文字通り身の引き締まるのを覚え、新しい気持ちで司会を務めさせていただいた。このような御用の陰にも、主の執り成しと多くの方の祈りのあることを思わせられた。

午後開かれた信徒会で、早速、この事を証しさせていたただいた。行き届いた主の御思いに、引き出されたのである。

思えば、私にとって長く、厳しい戦いの日々であった。空の鳥を見よ、野の百合はいかにして育つかを思え、と教えられながらも、見ゆる様に過敏になりがちなのが、病で経験させられるところである。しかし、これに耐え、乗り切ることができたのは、主が共にいて戦い、勝利を見させてくださったからである(歴代志下二十・十七)。

主に迫られる時、咽ぶものをとどめ得ず、裸の姿で御前に平伏すしか術のない事を知り、大きな感謝であった。(讚美歌 一三八)

高速の時代の流れの中で

—「神様への手紙」—

井田れい子(大濠)

今の時代は、何と高速で進んでいくのだろう。

私は、この現象がどうも好きになれない。携帯電話やインターネットの出現によって伝達手段は速まり、情報過多となった。瞬時に意見交換ができる便利さは否定しないが、すぐに対処を迫られるには閉口する。

だから、私は携帯電話やパソコンを、長い間持たなかった。機械が苦手ということもあるが、今の時代の「機械が主、人間が従」になりがち傾向へのささやかな抵抗と、「こんな人間も一人ぐらい居たっていいではないか」という、一種の開き直りからだった。

日本経済新聞の「健康」欄(二〇一〇年十二月十九日付)に、最先端機器で癌の早期発見……不慣れた医師の見落しも……と大きな見出しが出ていた。以前から危惧されていたことではあるが、最先端技術の研究者や専門家と現場を支えてい

る医者や看護師たちとの間に、落差があるのも否めない。

ところが、二年前に母が倒れ、大手術をした時は、時代の高速化を敬遠していたはずの私であったが、買ったばかりの携帯電話が大いに役立った。どこにいようと、どんな時であろうと、病院からでも、主人や子供達に母の様子や状況を、電話やメールで逐一報告できたからである。

その事によって、私の先端機器に対する抵抗感は少し薄らいでいき、携帯電話の次にはパソコンを購入した。一年前の事である。今、それは私の机の上に鎮座している。主人に教えてもらって最低限の事はできるようになったが、まだ頭の中が昭和から平成へと完全に切り替わったわけではない。分からない事があれば、インターネットで調べればよいものを、まずは辞書や地図帳などの書類に手が伸びてしまう。

年齢とともに低下する集中力や処理能力。それに加えて、身体機能の低下。ややもすると心身ともに疲れて、どこかへ逃避したくなる……。

「母と会っている時間」と「聖書を読んでいる時間」とが、そんな私の逃避先である。母との時間には、何十年前にも遡り、ゆったりとした昔のままの時間が、そこに流れている。

母は大腸癌(それも性質の悪い粘液腺癌)と診断され、転移していた背中とリンパの部分まで切除した。本人には腸閉塞と知らせたままであるが、その母が一年間の入院生活を経た後、元氣を取り戻して血色もよく、私と話をしているのは、まさに「奇跡」と思える。「手術をしなければ、あと半年です」と宣告された頃の母とは、とても思えない。

八八歳で手術をした母に、神様はまた命を下さり、もう二年も生かしてくださっている。天気の良い日に、ホームの庭で共に語り合っていると、真っ青な空の下、車椅子の母の後ろにイエス様の影を見る思いがする。

以前は信仰者の義務として読んでいた聖書だったが、こうも時代が日進月歩で高速化していくと、聖書一冊の中に何千年という歴史の重みがあることに、改めて驚かされる。その行間にさえ、何年、何十年という月日が流れていたりもする。

長い間、数多くの預言者や使徒達によって命を掛けて語り継がれ、また世界中の人々によって読み継がれてきたことに、とてつもなく大きなうねりを感じる。

新しい発見も多い聖書だが、私はモーセにまつわる箇所が気に入っている。モーセがイスラエルの民のために、いや私達のために、神様に懸命に抗議し、擁護してくれるところが

ある。特に民数記十四章にあるモーセの神への抗議は、実に感動的である。また出エジプト記三三章十一節には、「人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られた」とある。すなわち、神様は相手と対話する時は、顔と顔を合わせてするようにお造りになったのだ。電話でもなく、メールでもなく、実に直接的に相對するようにと。

少々の困難はあるかもしれないが、そこには温もりがあり、感動がある。

先日、電話で小学校の同窓会の案内をもらった。会場の場所がはっきりしなかったので、尋ねると「パソコンで調べれば？」と返って来た。どこかで待ち合わせて、久しぶりに懐かしい話でもしながら一緒に行こうと思っていたが、私にはもう次の言葉が続かなかった。

聖書を逃避先などと言っては神様に申し訳ない気もするが、どんな時代にあっても、どんな環境にあっても、被造物である人間は、その造り主である神様の息吹に触れる時、心穏やかになるのだということを、聖書は教えてくれている。

「神さま、

今の時代の速い流れの中で、不器用な私は溺れそうです。



一緒に泳いでいる夫に、時々手を引いてもらいながら時には怪我や病気をし、ブクブクと沈みながらそれでも、神さまのおいでになる所を目指して懸命に泳いでいます。

もし、二人が無事に、そちらに辿り着きました時には、『そんな力で、よくここまで来た！』と褒めてくださいね。』と

乳がん記

長 田 正 幸(前田)

のことである。薬も継続して服用しなければならない。
以上が今日までの経過である。

一 はじめに

今年のわが家は、八月まで特に変わったことのない毎日を送らせていただいていた。

ところが、自分の身に乳がんを発見。この時から、にわか
に慌ただしい状況となった。

二 乳がん手術と治療

八月中旬、乳がんを発見した。

九月上旬、手術、四日後に退院した。

三週間後、手術傷が落ち着き、放射線治療開始。休診日を
除き、毎日通って照射を受けた。十一月までかかった。

十一月下旬、放射線治療の経過、薬の投与の状況と、血液
検査等をあわせ診断の結果、

「通常生活に戻っていいですよ」と医師から言われた。

ただし放射線が胸を突き抜け、肺を傷つけている可能性が
あり、肺炎にならないよう、特に二月頃までは注意が必要と

三 なぜ乳がん？男なのに

今年の夏はことのほか暑かった。

私は、背中の左右に帯状疱疹のケロイドがあり、いつもの
夏は裸になることはほとんどなかった。今年は余りにも暑く、
耐暑・避暑には裸が最も有効であると分かった。

八月十三日、歯磨きして鏡を見ると、こころなしに左
胸がふくらんでいるではないか。さわると硬いしこりがある。
家内に言うと、脂肪の塊よ、と言う。

九月から指導する予定のウォーキング教室に支障のない
よう早く取り除こうと、益明けに病院へ行くことにした。

外科外来へ行くと、その医師は別の医師の所へ行けと言う。
その外来の所へ行くと、女性ばかり十数人待機していた。恥
ずかしくて小さくなっていった。最後に呼ばれた。

医師は組織採取のあと、血液検査、マンモ検査、CT検査、
超音波検査と、次々命じた。終わったのは十六時ごろであっ
た。昼食抜きだったので、ひどく腹がへった。

診察室で医師は、検査結果が八日後でないと判らないとい

いつつ、「あなたのは、乳がんの可能性が高い」と言う。

エッ？なぜ？男の俺が？乳がんか？頭は混乱した。（なお、乳がんにおける男性の比率は日本5%、欧米2%という）

免疫学の大家やがんの専門家が新聞紙上などで、適度の運動は生活習慣病のみならず、がんの予防にもなるといっていた。私はジョギング・ウォーキングをやっていて、消費エネルギーはいつも週二千キロカロリー（一日平均二八六キロカロリー）以上である。必要かつ十分な健康管理をやってきたという自負があった。（参考までに言うと、ハーバード大学の調査研究では、一万五千人以上の卒業生を二十年間追跡調査の結果、週消費二千キロカロリー以上の者が、罹患率はずっとも低いと発表されている。私はこれを目標にした）

これらの事から、生活習慣病やがんには罹るはずがないと思っていたし、血液検査の結果もよかったので、ウォーキング教室の参加者にも自慢げに説明していた。

ところが、がんになってしまった。何が原因か。たばこは生まれてこのかたやっていないのに。以前はよく飲んでいた酒も、最近では慎んでいる。食べ物か。十二年前、人間ドックで指導された食事献立を守っている。思い当たることはない。

強いて言えば、餅が大好きで、週二〜三食は食べる。以前、妊婦には餅を食べさせろ、乳の出がよくなる……と聞いたことがあるのでそれが原因か、などと考えた。混乱した。

四 悪党諸君

話題を変えて、永六輔の「悪党諸君」を図書館で借りて読んだ。

六輔は、落語の鈴々舎馬風（先代）と二人で刑務所慰問をした。相手は暴力団の受刑者ばかり。馬風は壇上で開口一番、「悪党諸君……こんにちは」とやった。

その時の聴衆である暴力団員の表情が様々で、六輔には面白かったという。六輔は面白がって本の題名にしたのである。私は二十歳の頃、寄席の最前列で馬風の落語を聴いたことがある。馬風は暴力団顔負けの（？）、容貌魁偉の印象であった。

その本の中に、東大の発生理学教授の話を紹介している。名前は書いてあったかなかったか記憶にない。世界的な権威者とのこと。

六輔が質問した、「男になぜ乳首があるのか。まったく役に立たないのに。」「よい質問だ。東大の学生は馬鹿ばかりで、今まで一度もこんな質問を受けたことがない。」

その先生の説明。……人間はすべて、受胎して約三十日間

は女性である。その後、男性の特徴が出てくる。(染色体のX Yだったか、その部分は当方が忘れた)女性のほうが上等で、男性はひとつ足りないの得上等と言えない。その女性であった痕跡がおっぱいである。……

「神は自分のかたちに人を創造された」(創世記一・二七)

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた」(創世記二・七)

「主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた」(創世記二・二三)とある。神は人間が子孫を残すため、東大教授の言うように男女を造り賜うたのであろうか。神には何でもできないことはない。何でもできるのである。

ということ、最初は私も女性だったのだ。私も乳がんになる可能性があるということだと理屈が通るのかどうか知らないが、納得したような気になった。

五 がん手術

検査結果が判明した。Iレベル(初期、最も軽度)→IVレベル(最も重症)と段階があり、私はIレベルと判定された。内

臓諸器官・骨への転移は認められない。が、放置すると悪くなるばかりなので、すぐに入院し手術を行いたい、よろしいか、と医師。

近頃はインフォームド・コンセントとかでいちいち説明し、よいかと承諾を求め、外科・放射線科の医師ばかりでなく、看護師(外来での入院説明、病棟・手術室での処置について)、薬剤師の説明など、各部門のチェックリストを持参し、終わりにサインを求め、直ちにすべてOKと承諾した。

医師は言う、「女性の場合、脂肪が厚いので手術は簡単。あなたの場合は、脂肪が薄く、筋肉に密着して少し厄介かも知れぬ。わきの下にリンパ液の通り道があつて、がん細胞が流出したか否かを見極めるのに、閥所のような三カ所を抽出し検査する。よいか。」承諾。

入院の翌日手術、簡単に終了した。(麻酔のため短時間に思えた)

すべて良好な結果を得た、と医師からの説明であった。それでも、まったく役立たずのおっぱいとはいえ、削り取ったと言われると、ひどく寂しい思いがした。意外であった。

六 主がなされたこと、苦しみを感謝しなさい

男なのにどうして乳がん?健康管理は十分なのに?と混

乱している頃、主に祈った。「私を憐れんでください。乳が
がひどい結果にならないようにしてください。」

そうした時、教会での榎本牧師のお話がよみがえった。

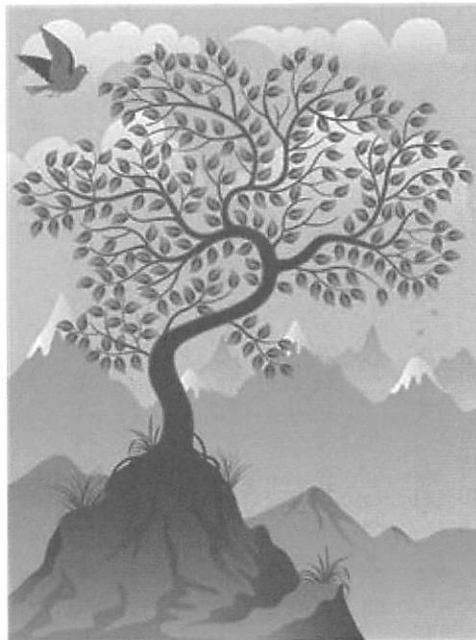
「人はとかく自分の力で生きている、自分の努力で今を得
ていると思ひ違いをしやすい。困難に遭遇した時、他人のせ
いにしたり、他人と比べたりしてはいないか。どれひとつ神に
よらないことはないのだ。自分を低くして、すべてを主に寄
り頼み、委ねなさい。またパウロやヤコブがいうように、詩
篇一九篇七一節にあるように、艱難を喜びなさい。与えら
れた苦しみを感謝して受けなさい……。」聖書の言葉を読み
ながら、このようなお話であつたように記憶する。（お話の主旨
を十分吸収できたかどうか分からないが）

すると、なぜ男の俺が？乳がんか？とか、ジョギング・ウ
オーキングをやつていて健康に自信があり、がんに罹るはず
がない、と思ひ込んでいる自分は、まさに思ひ違いをしてい
るのではないか、と思うに至つた。

すべてを主に委ねよう。手術も治療も、主が医師を用いて
なされることに従おう。乳がんは神様が私になされた事であ
り、感謝して受けよう。このようなことを祈つた後、平静な
心境になつた。

現在は、薬を服用して、完治に導いていただこうとしてい
るのである。

（二〇一〇年二月八日、記）



神様の主権のもとで

間 二葉（大和カルバリーチャペル）

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」（ローマ八・二八）

「万物は、神から出で、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アーメン。」

（ローマ十一・三六）

先ずはじめに八幡前田教会や大濠公園教会の会員ではない私にお証の機会が与えられたことを感謝します。神様の不思議なお導きを感じずにはおられません。

私のことをご存じない方も多いと思います。私は、二〇〇九年に大濠公園教会で正野敬士さんと結婚した多恵子の母です。榎本和義先生、文子先生とは名古屋の、活けるキリスト一麦教会以来のお付き合いで、かれこれ四十年近くになります。

今年二月に多恵子が深幸ちゃんを出産し、その手伝いのた

めにしばらく福岡に滞在いたしました。孫は可愛いという話は常々聞いておりましたが、実際に深幸ちゃんを抱っこしたときに、特別な感動を味わいました。しかし二年前には、娘が福岡に来ることも私がおばあちゃんになることも何一つ想像できない状況でした。

私は今から三十年前に結婚し、現在神奈川県で生活しておりますが、和義先生、文子先生とのお付き合いで私には「主にある家族」がもう一つ存在するという事を感じさせられました。少しさかのぼりそのことに触れたいと思います。

私の母は、活けるキリスト一麦教会で救われ、一人娘の私は幼い時から教会に通っていました。今から四十年前、和義先生方が一麦教会の近くに引っ越してこられたころ、母は婦人会の会長で伝道熱心な信者でした。当時お嬢さんのように若い文子先生を教会の集会にお誘いし、家庭集会にも車でお連れしたそうです。私は母に勧められ、手作りのぬいぐるみをプレゼントしました。文子先生はそれを大変喜んで下さった事を覚えています。

和義先生との出会いは、当時中学三年生の私が進級する際、CSに高校科を創設し、和義先生が担当になるといふ話からでした。何事にも準備が良い先生は中学の冬休みのころから

私に声をかけ、自宅に招いて食事を御馳走して下さい、四月に進級する頃には私は和義先生にすっかりなついていました。最初は高校科も私一人ではなかったと思いますが、しばらくするとなぜか先生一人生徒一人の贅沢な時間となっていました。一年間和義先生のメッセージを一人で聞くという榮譽に浴したわけです。この時に学んだ事が私の信仰生活に大きな影響を与えたのは確かな事です。その後CSのご奉仕に参加するよう誘われ、中山陽子さん(限上望都神学生のお母さん)や榎本先生とCSの夏季キャンプの下見に出かけたり、旅行したりと、楽しい思い出は山のようにあります。日曜日は朝から晩まで教会で過ごしておりました。

一九七七年二月、ここで榎本先生とのかかわりがさらに深まる出来事が起こりました。

大学一年の冬でしたが、母が再生不良性貧血で三週間の入院の後に天に召されてしまいました。その当時も母は婦人会の会長であり、教会の役員だったので入院中に婦人会の方が交代で病院に付き添って下さいました。改めて振り返ってみると、婦人会の皆様には本当にお世話になりました。母が意識をなくす前日、文字先生が母に付き添って下さいました。その時母は先生に「二葉の事をよろしく願います。」と頼んだそうです。当時の母は五二歳、今の私の年齢です。そし

て、文字先生は当時二八歳で、現在の多恵子の年齢と重なります。こう考えてみると、母は随分若い婦人に娘の事を託したわけですが、一人残される私のことが心配で仕方なかったのでしょうか。

その後、私の人生の大切な節目には必ず榎本先生が登場するようになりました。

主人と結婚するきっかけもそうでした。榎本先生のお宅でいわゆるお見合いをして、結婚の運びとなりました。そして結婚の証人になっていただきました。その後、長女の多恵子を出産した時は向先生(松原向 活けるキリスト一麦教会前牧師)とともに厚木までお見舞いに来て下さいました。子どもたちが成長して小学生のころは春休み毎に福岡の教会をお訪ねして、楽しい思い出をたくさん作りました。

私の父が二〇〇二年に亡くなった時は父の葬儀もして頂きました。あの時の私たちは通っていた教会自体が無くなっていたので大変心強かった事を覚えています。

そして、多恵子の結婚式は和義先生の司式で行われました。奏楽の限上陽子さんをはじめ、望都さん、平野和美さんら一麦つながりの方に囲まれて感慨無量、信じられない光景でした。

今回の娘の出産時も榎本先生は駆けつけて下さり、娘の様

子を逐一私にメールで送って下さいました。遠く厚木に住む私たちはどれほど安心したことでしょう。感謝でいっぱいです。

ここで初めに戻り二〇〇九年の春のいきさつをお証しいと思います。

四月初旬に和義先生から狭心症の疑いがあるので明日から検査入院するという電話をいただきました。急なお話してびっくりして落ち着かない夜を過ごしました。翌朝、どうしてもお見舞いに行くべきだと思い、主人に相談して福岡行きを決めました。カテーテルの検査後、先生の心臓の血管の一部がウインナーの連結部のように細くなっている画像を見た衝撃は今も鮮明に残っています。大きな発作の前に見つかった事を神様に感謝しました。因みに私の所属教会、大和カルバリーチャペルの大川先生も半年ほど前に心筋梗塞で緊急入院されました。

お見舞いに来たのですが、この時の私は和義先生に相談したい事がありました。多恵子の勤めていた会社が二〇〇八年後半より不況のあおりを受け、希望退職を募るようになり、多恵子も四月末には退職することが決まっていたのです。先生の病室で「実は多恵子がですね……」とリストラされる事、

そして今後の事を相談しました。先生は、「ちょうどよい機会だから久しぶりに福岡に遊びに来るように多恵ちゃんに話してよ」と言ってくれました。初めは遊びにおいてということだったので、五月になると先生から、福岡で多恵子に会わせたい青年がいると言われ、思いがけない展開になりました。多恵子は福岡には十年近く行ってなかったのですが、断るのかと思いきや快諾したのです。多恵子の答えを聞いて、何か不思議な御手に動かされているように感じました。そのあとは驚くように事が運び、九月に結婚式をあげさせて頂きました。

神様が失業という事態まで起こして娘の人生を変えて下さった事に大きな驚きを感じました。クリスチャンの敬土さんと結婚したこと、そして榎本先生の下で魂が養われるようになることなど、最高の環境に導いて下さいました。多恵子のためには夫婦で何年も涙して祈って来ましたので、本当に嬉しかったです。神様は私たちの期待以上の事をして下さいました。

そして今回、深幸ちゃんをあたえて頂き、さらなる恵みをいただきました。大濠の教会でお茶の時間に、和義先生が「僕が狭心症にならなかつたら、深幸ちゃんはこの世に存在しなかつたね」と言われました。誠におっしゃる通りで、その言

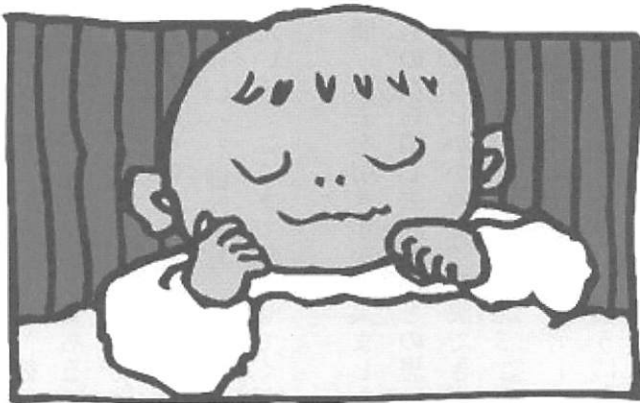
葉は深く心に響いております。和義先生には申し訳ありませんが、痛い思いをして下さって、我が家に、娘に、多大な祝福をいただいた事になります。「マイナスは必ずプラスになります。私の周りには奇跡が起ります。」この言葉を大和教会の祈祷会では毎週宣言していますが、私の身に現実のものとなりました。さかのぼって考えると、四十年前の榎本先生との出会いも神様の導きでした。その事が、深幸ちゃんの誕生につながったとも言えます。神様の御摂理の奥深さを思わずにはいられません。

神様の主権のもとに私の人生があるという事が示されて、この不思議をなして下さった神様の前に、襟を正されると言います。か、厳粛な畏れを感じるものです。そして、天国で母、向先生、信仰の先輩がお祈りくださって、このような恵みにあずかったことを覚え、感謝で一杯です。

「見てごらん下さい。神のいつくしみと厳しさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。」

(ローマ十一・二三)〔新改訳〕

神様の憐れみの中で深幸ちゃんを抱くという恵みにあずかりました。この幸いを忘れずに主にお従いしてゆきたいと願っております。



主の備えし道に歩みて

石 田 秀 子（前田）

二〇一〇年は、神様の選びと召しにあずかり、受洗を与えられて三十年を迎え、また六十代最後の年であり、私にとつて節目の年であります。

「今あるは、主の恵み」(第一コリント十五・十)であり、また、「主は今に至るまで、われわれを助けられた」(サムエル上七・十二)と感謝の言葉もあります。ただ御名を崇め、褒め称え、御前に平伏すのみです。

かつては罪人の頭であり、「わたしの愚かによって、わたしの傷は悪臭を放ち、腐れただれました」(詩篇三八・五)の御言にありますように、罪の報いを受けるならば、とうの昔に滅び失せていた私です。こんな卑しい罪人のために身代わりとなって死んでくださった主イエスを、私の救い主と信じさせていただき、全ての罪を許されたばかりか、甦りの主により新しい命に生きる神の子として、天に国籍を持つ者としていただいたご恩寵を、心から感謝いたします。

三十年の間には、様々な事がありました。神様に従って行

きたいと祈り、願いながら歩いたつもりでも、信仰が持てず、疑い恐れ、苦しみもがく日々も過ごしました。しかし、「たとい、わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることができないのである」(第二テモテ二・十三)と、「神はあなたがたをかえりみてくださるのであるから、自分の思いわずらいをいつさい神にゆだねるがよい」(第一ペテロ五・七)と、いつも御言を与えてくださり、力を与え、励ましをいただいで、ここまで歩ませてくださいました。

私は永い間、過去を引きずって来ました。あの年月、あの事を消せるものなら消し去りたいとの思いが心から離れず、重いものが心にのしかかって、解決できずにいました。平成二一年四月に兄が亡くなりましたが、この兄との和解を毎日祈らない日はありませんでした。「どうして、あんなに心の行き違いが起こり、行き来できないようになったのか。誰が悪いか、何がいけなかったのか。」と、自分の罪を認めることができずにいました。告別式にも出席できませんでしたが、その時、神様の前に静まり、祈りを捧げ、導きを求めました。私は全ての罪を許していただいた者なのに、あの人が悪い、この人もと、自分の罪を認めようとしないうちの罪を示されました。私を許してくださいと悔い改めを請い求めました。

この時、教えられたのは、告別式に行かなくても、今この時が神様の赦しと兄との和解の時であること。そして兄の魂を安らかに御国に帰らせていただいたとの信仰が与えられたことでした。

今まで味わった事のない心の平安、心の静けさ、神様の御愛に触れて、「ああ、これが神様の御心が行われた事なのだ」と確信させていただき、心をこめて兄を送ることができた事が、本当に有り難く、感謝に堪えませんでした。

「わたしは光を造り、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する。私は主である。すべて、これらの事をなす者である」(イザヤ四五・七)

私の全ての過去も、神様が造り、私でしか通ることのできない道を備えてくださって、歩ませていただいた恵みの道でした。これがあつたればこそ、今の私があるのです。「あなたは、主でいらつしやいます。主よ、感謝します」と受け入れさせていただいた時、心の重荷を取り除き、問題を解決してくださって、嘆きを感謝に変えてくださいました。

その時以来、今まで祈れなかった人々のために、祈らせていただく者とされました。本当に有り難く、感謝です。

四月には、教会の方々と大田邦子姉、太田香代子姉の所を

訪問することができました。神様の恵みと祝福を頂いた素晴らしい旅行でした。桜の花がとてもきれいで、楽しいひとときでした。お二人ともお元気な様子で、喜んでくださいました。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。私は造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)とあるように、神様の御計画の下に素晴らしい環境の中に置かれ、命の主と共に日々を歩まれていらつしやる様子を拝見させていただき、心から喜び、感謝いたしました。太田香代子姉、鳥越久美姉の行かれていた富士川教会の婦人会に出席させていただき、交わりの時が与えられました。お互いに讃美歌を歌い、主の御名を褒め称え、昼食を頂きと、神の家族としてのお交わりはまことに楽しく、素晴らしいひとときでした。

七月二一日に、十七年間生活を共にした愛犬アトムが、老衰のために亡くなりました。私より一日前に召してくださいと願ひ、祈っていました。アトムを残しては可哀想ですから。この夏は大変暑くて、六月から弱っていたアトムにはこたえたようです。一ヶ月くらい看護ができて、最後まで看取ることができ、感謝でした。

また、何年か前から首が痛み、車の運転が少ししくく、

特にバックする時、左に首が回りにくいので、近くの整形外科科に行っていたのですが、痛みが取れません。それで新日鉄八幡記念病院の整形外科に行き、レントゲンを撮ってもらいましたところ、首の骨が折れている跡があり、そこが固まって神経を圧迫しているから痛むのでしょうかと言われたので、びっくりしました。今まで何度もレントゲンを撮っているのですが、一度も言われたことがなかったのです。そう言えば、二五〇二六年前、会社に勤めていた時、二階の階段から真つ逆様に落ちた事を思い出しました。その時もレントゲンを撮り、治療も受けたのですが、何も言われずに今日まで来たのです。

整形外科から麻酔科に回されましたが、そこで中央町にある麻酔科の病院を紹介されて行きました。その先生が言われるには、大変危険な個所が折れているため、医者からも「治療するのをビビります。」と言われました。

私は、神様に心から感謝しました。今の今まで、私は知らずに過ごしてきました。あの時、手術をしていたら、もしかして寝たきりになって、ベッドで過ごす一生であったかもしれない、死んでいたかもしれない、と思いました。

また、二年前、少し心臓が苦しいような気がして病院に行っただけなのに、狭心症と言われて、カテーテル検査、ステ

ント(経皮的冠動脈形成術)を受ける結果となりました。ここにも、私の知らない所で主の導きがあったのです。この検査は来年六月頃、また受けることになっています。

私は現在、中央町の病院に週一〇二回ぐらい行き、針の電気治療、リハビリ、投薬治療を受けています。今まで守り支えてくださった神様のご慈愛と憐れみに寄り頼み、御手に握っていただきながら、痛みとうまく付き合って行こうと思っ
ています。十一月には、京都の紅葉を見に行くことができ、感謝でした。

「主は言われる、わたしがあなたがたに対して言っている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」(エレミヤ二九・十一)

私に対して、すでに御計画を着々と実行して下さっています主、その主の備えてくださる道を喜び、感謝し、その御計画に従って歩ませていただく主の恵みを覚えつつ、主がこの世に生かしてくださるその時まで、主イエス様の十字架の御愛に寄り頼み、委ねる信仰に堅く立たせていただきたく、切に祈り続けて行こうと願っています。

主よ、御心のままに

門 司 澄 子(前田)

このところ、春風には程遠い冷たい風が吹いています。

一 昨年のは頃は、次女宅近くの金山川の川辺に写った満開の桜と菜の花を見ながら、前立腺癌に良いからと、アナタとスギナを採り、きれいに洗って陰干しして、お茶にして飲んでいました。

その金山川で、今年は一人だけで見える桜……。春風が冷たく吹いて、肩に手に花吹雪が舞って、見事に咲いていました。今年は、スギナを取る必要もなくなつたんだ……。まだまだそんな事を思い出しています。

先日、長年住み慣れた門司の家の様子を見に行った帰りに、役所へ戸籍謄本を取りに行き、あなたの名前が抹消されているのを見た時、死を受け止めなければならぬ現実をどうすることもできず、小雨の降る中、急ぎ足で門司駅へ向かい、電車に乗りました。窓の向こうの木立が風に揺れていました。

窓に写った私の頬には、とめどなく涙が出て、座席の横に

座っている人の目も気にならないくらい、涙で顔がくしゃくしゃになっていました。

遠藤周作さんの小説「深い河」に、亡くした妻を探す夫の姿が描かれていましたが、本当に主人公の心境がよく分かりました。もう戻っては来ない、と頭では分かっている……。それなのに、感情の波が常識や理性を瞬く間に押し流してしまふ。あなたに似た男性がいると、思わず小走りで確かめに行きたい……。随分愚かな事も、頭の中をよぎりました。

癌が見つかった時のショックはとても大きく、完治する見込みがない病気であると医師に告げられ、奈落の底に突き落とされたような衝撃的な気持でした。主人は、いつ病状がどうなるか分らない不安を抱え、それでも必死でネットの情報を収集して、それとにらめっこしていたようでした。

当初は落ち込んだものの、二年半余り、人前で涙を見せることも、塞ぎ込むこともありませんでした。一人で居る時はどうだったか分かりませんが、私や子供達、孫への心配りからか、いつも明るく振る舞っていました。

幸い、死の半年前までプールへ行ったり、仕事も頑張つて、「仕事をしている時が何もかも忘れられて、一番楽しい。」と言っていました。その後、痛みが少しずつ出ていても、俳句

を作つて投稿しては、「今度は文壇にデビューだ。」と言つて、その世界にのめり込んでおりました。西村京太郎の推理小説もどんどん読んで、遂には百冊を越えていました。身体はどこにそんなエネルギーがあるのかと思うくらい活動的でしたし、放射線治療をしていた頃には、医師から「自転車に乗つてはいけませんよ。骨がもろくなつていきますから。」と言われ、人の心配をよそに乗っていました。

自分の努力を信じ、何事もうまくいくと思えば、全て思つた通りになる、一生懸命頑張りさえすれば、物事は必ずいい方向に向かつていく、と信じる前向きな人でした。

でも神様は、ここで主人にストップを命じました。

主人は愚痴やマイナスの話を好まなかつたし、取り乱すこともありませんでしたが、二年半の心の揺れが、私には痛いほどよく分かりました。自分ではどうすることもできない弱い者だと認めて、神様を受け入れて、信じて欲しいと祈り続けていた私……。主人の心を変えるのは、いくら夫婦であってもどうすることもできません。

主よ、私はあなたに従います、と心を定めて神様に委ねて歩まなければ……。そんな日々でした。

人生の苦楽を共にすることで、いつの間にか一心同体となつて、自分の中にある何かを失う、そんな恐ろしさと絶望感

の中で過ごしたこともありました。でも私には、困難や試練に遭つた時に、神様が与えてくださった御言があります。

「いろいろな試練に会つた場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。信仰がためされることによって、

忍耐が生み出されるからである」(ヤコブ一・二)

そうだ、神様、ありがとうございます。神様によって、私は、今信仰が試されているのだ……。私の気持が、だんだん落ち着いて来ました。

一月に入つて、片手に英語の聖書とパソコンを持つての入院生活が始まりました。

ある日、主人から「今日は、金生先生が来られて、詩篇二三篇を読んで、いろいろお話をして帰られたよ」と、明るい声で喜んだ電話が携帯にかかつて来ました。

「主はわたしの牧者であつて、わたしには乏しいことがない。

主はわたしを緑の牧場に伏させ、

いこいのみぎわに伴われる。

主はわたしの魂をいきかえらせ、

み名のためにわたしを正しい道に導かれる。

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわざいを恐れません」(詩篇二三篇)

神様、感謝します。私はすぐにお祈りをしました。

何度か先生においでいただく内に、御言を心から信じるようになり、神様を心から受け入れるようになっていき、頑なな主人の心が解きほぐされていきました。医学的見地を遙かに超える生命力を維持していただいていた頃と思います。

それも限界に近づいていき、命の灯が細くなっていくのを感じずにはいられなくなりました。

「主よ、御心のままに」

二月二十日、荘厳な光の中に入っていくように、主人は天国に旅立ちました。

長きに亘る、牧師先生はじめ、教会員の皆様のお祈りに感謝いたします。



信仰雑感 (三)

首 藤 正 (前田)

一 それでよろし

私はアスペルガー症候群(発達障害)である。典型的なKY(場の空気が読めない)傾向のため、生涯が空転してしまった。対人関係がちぐはぐなのを苦にして、何とかして直りたいと空しい努力を続け、何の成果も得られないまま、今日に至った。これさえ直れば、万々歳なのと思いつめ、不幸の元凶はこれだと決めつけ、渾身脱却を図ったのであるが、駄目だった。今も、ちぐはぐのまんまである。

教会へ来たのも、目的と動機はこのKYの消滅にあった。長いこと、祈りの課題でもあった。罪とか救いとかは、今にして思えば二の次だったから、もし、求めるものが快く与えられたら、何の未練もなく教会を後にしていただであらう。事実、得られない事に幻滅して一度は、教会は無縁なものとして離れていった。

しかし十年後、激烈な神経症のせいで、舞い戻った。思えば便々(無駄に時が過ぎる様子)八十年、風を捉えるような足掻

きだった。

「私の恵みは、お前に足りている」とか、「私の力は、弱い所にこそ顕れる」とかいう使徒パウロの言葉は、今もつて遠い。今日ただひとつ言えるのは、何であれ、その事を通して、神様が崇められることが全てであると、わずかながら思えるようになったことで、KYの比重が少しは減った気がするこゝとである。これを収穫と言い得るものなら、生涯で得ただただ一つの実感かもしれない。

年齢に比べて若いとよく言われるけれど、成長のしそびれのように聞こえて、この分ではアスペルガー症候群は生涯の伴侶かもしれぬと苦笑のほかない。耳に聞こえぬ響きは、いつも

エス イスト グート

昔聞いた忘れられぬドイツ語だが、「それでよろしい」という意味であった。

こんな空っぽな人生なのにと良く思うけれど、見えぬ彼方からよこされる音信は、当分、いやずつと、こうなのかもしれない。

二 事を行うエホバ

余りの痛さに音をあげた家内は、やつとのこととで病院へ行

く気になった。内科の開業医へ駆け込むと、血液検査とCTスキャンとの結果、医師からこれは腹腔内の激しい炎症と見えるから、至急、内科の総合病院へ行くよう紹介状を書いてくれた。

それを持ってその総合病院へ赴くと、院長先生が診てくれ、虫垂炎の膿が漏れて、小腸と大腸の境の所から脹れ上がっており、内科では手に負えぬから、外科のある大病院へすぐ行くように言われ、またまた先方へ連絡してOKの取得と紹介状をもらって走り込み、急患の診断で断層検査の結果、「虫垂炎穿孔の疑い、腹腔内膿瘍」との所見の下に、即入院。

取り敢えず、点滴による抗生剤投与で炎症鎮静化を図り、病状が改善しなければ開腹手術という方針を説明され、とりあえずの痛みの緩和のため、筋肉注射を受けたが、嘔吐・下痢を生じるので座薬に切り替えたら治まったので、日に四回の座薬使用で対処している内、七日目に至って突如、激痛が消失し、九日の血液検査の結果で手術不要、当分点滴による抗生剤投与で行くことに落ち着き、ついで夕方、あと一週間後に退院し、その後は通院診療で対処するとの方針を主治医から伝えられるに至った。

座薬使用はあくまで対症療法だったのに、七日目以降完全に痛みがなくなったことを、主治医は「信じられない」と首を

かしげたそうである。

もともと激痛を我慢して、何とか病院へ行かずに済ませた
いと、家内が頑張っていた当初から、未信者の家内には告げ
ずに秘かに祈り続け、「汝、悩みの日に我を呼べ、我、汝を助
けん。しかし、汝、我を崇むべし」の約束の御言葉にしまか
りとすがりつき、繰り返す主にお願ひし続けた結果が、如上
の結果となつて現われた。

お言葉の如く、目覚ましく助けの御業を行つてくださり、
何度も、何度も主を崇め、感謝申し上げた。

かのアブラハムの僕が、主人の子の縁談で祈つた際の心境
の一端が偲ばれる思いで一杯である。

三 二番目

六歳の孫娘が、待望の幼稚園主催の芋掘りから意気揚々と
帰つて来て、収穫を見せてくれる。

「ほう、沢山取れたね。頑張ったね」と労うと、会心の笑み
を浮かべ、すぐにいつもの遊びに夢中になつていゝうち夕方
になつた。迎えの母親が立ち寄ると飛んで出て、おばあちゃ
んを交えて玄関先で何やら話声がしていたが、大急ぎで取つ
て返し、「おじいちゃん、お芋の二番目に大きいのを上げるか
らね」と、目を輝かして言うから、「ほう、それはありがとう。

おばあちゃんと食べるの、楽しみだね」と答えはしながら、内
心、「何で、一番大きいのをくれんのかね」と、ちよつぱり有
難味も今いちの感じがしていた。

兄弟ともども母親の車で自宅へ帰るのを見送つた後、くれ
たのはいいが、二番目かとなんだか物足りなく思つていゝと、
それがたちまち信仰問題に結びついた。

何かにつけて自分の考えが先立つて、後からハツと気が付
いて神様の御旨をお伺いするというのがよくある。なかな
かいちはやく、「主よ、これはどうしましょうか」と、心が主
に向かないきらいがある。つまり自分が一番手、主が二番手
という順序になりがちで、これがいけない。

祈つて主に助けを願うと同時に、自分でも訓練して、癖・
習慣としていく必要が大いにある。とここまで辿つて来た反
省を一応まとめのため、紙に書くことで定着さすという自分
なりの作業を行い、これはこれで一件落着扱ひしたのである
が、その夜、いつもの散歩へ家内と出かけ、道々雑談してい
る内に、ふと別見解を思いついて、孫の二番目という言葉の
解釈として、「何と言つても自分の所が一番。じいちゃん、ば
あちゃんは二番手と考えとるんやろなあ」と言つたところ、家
内が笑つて、「それは、私が二番目はおばあちゃんの所がいい
から、一番大きいのは家へ持つて帰つて、お父さんに見せな

いと言って聞かせたのよ」と、真相を聞かせてくれた。

ガーン、私としたことが、想像力不足もいとこだった。おばあちゃんから言われた通りに、大威張りでしたのを、六歳自身の考えからだなんて取り違えて、おまけに信仰上の教訓まで紡ぎ出して、かたをつけたつもりでいたのであった。

早とちりにめげてしまったが、よく考えてみれば、私の反省なんぞさつぱり棚上げしても、家内のこう言う、「お父さんに一番目を差し上げなさい」を、「父なる神を第一にせよ」に変換すれば、そのまま「まず神の国と神の義を求めよ」のお言葉に通ずるではないか、と気づくに至って、回り道ながら、終息に辿り着いたのである。



長女の受験の思い出

下 川 泰 廣(前田)

「主は言われる、わたしがあなたがたに對していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」

(エレミヤ書二九・十一)

毎年、受験シーズンになり、各大学の志願状況が新聞やテレビで報道されるようになると、この御言が浮かんでくる。そして、長女が志願していた大学がテレビに出ると、家族の視線は長女の顔に集中するが、当人はあの苦しかった浪人生活の事など忘れたかのように、平然としている。

長女が小学校に上がる時、家内が某私立のミッションスクールに受験させたらと、長女の将来を考えて提案した。当時、家内は信仰を持っていたが、私自身はキリスト教に對しての知識は全くなく、学校の教育方針がキリスト教に基づいてしつかりしているということで、情操教育の面でもよいだろうと、受験させた。子供にとっては、幸か不幸か合格し、小・中・高と順調に進んできた。

その間の十二年間に、社会情勢は大きく変化し、日本は高度経済成長を遂げ、世界一の経済大国となった。それに伴い、社会の要求も高度の知識が求められ、高学歴社会となった。特別な事情がない限り、ほとんどが進学する周囲の環境もあり、長女は大学進学を希望し、そのための受験勉強を始めた。短大か、専門学校に行つて本人の適性に合う職業について、信仰に励んでくれることを望んでいたが、本人の意思は固く、目標の大学を目指して、夜遅くまで頑張つていた。

本人の力と希望大学のレベルを見ると、現役では無理だろうと、一浪を覚悟していた。その時は、私も救いに与つたので、主の御旨であれば、道が備えられていて、人の目は無理なように見えても、神様が必ず道を開いてくださる事を信じて祈り、全てを委ねた。

しかし、現役で失敗、一浪、二浪と道は閉ざされ、親子とも挫折そうになった時、神はこの小さき者を憐れんで、支え導いてくださった。

「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによつて鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」

(ヘブル十二・十一)

毎年、不合格通知を手にして、失敗の悔しさと自分自身の

無力さに対する腹立たしさか、机に顔を伏せ、嗚咽する後ろ姿を見ると、不憫に思えた。そして、二浪で諦めると思つていたら、あと一回だけチャンスを与えてくれと哀願する子供を見て、これも主が何かを教えようとされているのだと、祈つて最後のチャンスを与えた。

ひたむきに勉強に打ち込む姿を見て、道が開けるまで続けさせてやりたいが、次女の進学を控えていることもあつて、今年が最後のチャンスと、本人も納得してスタートした。

しかし、人間の計画は思い通りには行かないもので、母が病に倒れた。看病のために家内の仕事を辞めさせれば、次女の進学を控えて経済的な問題が生じ、少々負担を強いても、長女が看病することが、進学するための唯一の選択肢だった。

長女は、母の看病と家事の合間を見て、勉強に励んだ。そして、最後の望みを託して、受験のために上京する朝、玄関で母と家内と長女が祈っている時、私は目を覚ましていたが、玄関に出て見送ることができなかった。それは、長女の顔を見るのが辛かったからである。しかし、床の中で主に立ち返つてみると、不思議なように平安が与えられて、道が開かれようが開かれまいが、全力を出し切って悔いのないようにと祈つて送り出した。

しかし、大学受験への道は、開かれなかった。進学の夢を

捨て切れないうまま、専門学校へ入学した。そして二年間、資格取得を目標に頑張っていたが、最終目的の難関は達成できず、就職するか、アルバイトをしながら資格取得を目指すか迷っている時、ある大手企業の就職の話が来た。本人は資格取得の勉強を続けたい意向であったが、受けるだけ受けてみたらと周囲の勧めもあり、受けることになった。

書類を準備するために博多から帰宅途中、黒崎で榎本先生とお会いして、「今度、入社試験を受けますので、お祈りしてください」とお願いしたと聞き、少しずつ神様に近づけられていることを感謝した。不思議な導きにより採用通知が届き、最善の道が備えられたのである。

長女の五年間を振り返ると、多くの学費と自分のエネルギーを燃焼させて、所期の目的は果たすことはできずに、悔いは残ったが、親子とも見えない御方の存在を教えられて感謝である。毎年のボーナスは、予備校と受験費用に消えていたが、子供達はひっ迫した家計を助けるためにアルバイトをすることで、経済観念もしっかり身についた。

私が愚痴の一つでも口にする、家内は「お父さん、必要なお金は神様が与えてくださるから、お祈りして従って行きましょう」と諭される。そして、やっと肩の荷が降りた今日、子供に対して何の不満も口にならず、「浪人したおかげ

で、どんな道を歩もうとも、主が共にいてくださることを実感することができることは、大きな恵みでした」と感謝する。家内の姿を見ると、主に謙って従う事を教えられている。四月から社会人としてスタートする長女が、自分の歩みを振り返って、信仰を持って歩む人生の素晴らしさを悟り、イエス・キリストを救い主と受け入れてくれることを祈る毎日である。

「王の心は、主の手のうちにあつて、水の流れのようだが、主はみこころのままにこれを導かれる」(箴言二一・一)。

※ この原稿は、平成三年二月ごろ書き記したものです。今回、家内が受洗五十年のお証しを書くための資料を探している時に、出てきました。当時、「ぶどうの木」に投稿する予定で書いたのですが、長女の心情を思つて保留していました。二十年前の事を新たな気持で読み返し、神様の恵みに感謝しました。

その長女も結婚をして、一女に恵まれています。進路の事で何か問題に当たると、「お母さん、祈って」と電話が来るたび、自分の歩んだ道と同じ道を辿ることによって神の存在を知り、少しずつ神様に近づいているようです。

若い人たちへの勧め

榎本和義 牧師

二〇〇〇年の秋に「キリスト教教育強調週間」の行事として、高校二年生に「キリスト教信仰」に関する話をする機会が与えられました。今時の若者が何を考え、どんな生活であるか想像もつきませんでした。聖書を通して教えられることを話しました。

その後、この学年が三年生になる直前、二年生の終わりの時、再度、人生を生きる示唆を与えられればと、特別に時間を取ってくださって、お話する機会ができました。そのとき、前準備としてあらかじめ読んでもらうために以下の一文を配布しました。いささか時間が経過したのですが、内容については老若を問わず、人として生きるために必要な基本的な受け止め方を語っています。これは信仰によって生きようとするとき、私たちが絶えず問い直すべき基本姿勢でもあります。その意味で、是非、皆さんにも読んでいただきたいと思えます。また、まだ神様を知らない方から質問されるようなとき、少なくともこれだけのことは語っておくべきだとも思えます。参考にしてください。

女学院高校二年生の皆さんへ

寒かった冬も過ぎて、今年も三月になり三年生の卒業を見送って、いよいよ高校生活最後の学年に進もうとする時となりました。これまでの学校生活を振り返って、悔やむ思いと不安、また期待と決意が心の中に交錯しているときではないでしょうか。昨年の秋に行われましたキリスト教教育強調週間で「学年の取り組み」の学年講師として、お話をさせていただきました。お伝えしたいと思っていたことを充分にお話できたのか気になっていましたが、後日、その時に、書いてくださった感想文を読ませていただき、あなたが置かれている事情・境遇の中で、真剣に聞いてくださって、「自分がどのようなものとして生きるのか」考えてくださったことを知り、ひとまず私が意図したことを受け止めてくださったことを嬉しく思いました。女学院での六年間の学校生活最後の学年に進級するこのときに、ぜひ今一度、昨年秋のテーマを踏まえ、また、感じて下さった感想を念頭に置きつつ、一言メッセージを送りたいと思っこの一文を書いています。

簡単に昨年お話したことを振り返って見ますと、まず、私

私たちは神様に造られ、生きるものであって、人の知恵や計画によるのではないということが一つです。自分の力や考えで自分の人生を切り開いていくように思いますが、過ぎてきた人生を振り返ると、決して願った通り、計画通りに生きてきたのではないことを知ることができます。人は偶然だとか、自然にとか、そのような言葉で説明しようとはしますが、偶然や自然に支配されて生きるのなら、私たちの人生は意味のある人生とはいえないでしょう。人生の背後にあつて、全てのことを導かれる見えざる神様がおられることを信じて、絶対者なる神様が私たち一人一人に備えてくださる人生を今生きていると、確信することによって、人生を十全に生きえるのです。思いがけないこと、考えもしないこと、失敗と思えること、など、これからの人生に必ず起こってきますが、決して失望しないで、神様を信じて、進んでください。なぜなら、神様は私たちを愛して下さっている方だからです。愛して下さる方が私たちに良くして下さらないことがあるでしょう。自分の願いと違って、自分の計画と違って、与えられた事柄・事態を神様の愛を信じて、感謝して受けるとき、失敗と思えたこと、不幸と思えたことが決してそうではなく、一番良かったこととして喜ぶことができる 때가かならずあります。

では、神様が何でも決められるなら、私たちの願いや計画は無意味ではないかと、思われるでしょうが、そうではありません。私たちが願いを持ち、夢を持つことは大切です。なぜなら、それは神様が私たちに与えておられるものだからです。しかし、それらを実現にいたらせてくださるのも神様です。しかも願いや夢をもつことを通して、神様が私たちにご計画しておられる幸いを与えようとしてくださるからです。私たちの願いや夢がどのような具体的な道筋で実現されるのか、私たちが決めることはできません。が、一日一日、神様が備えて下さった地上の命を、力を尽くして生き抜く過程を通して、私たちに想像を越えた、思いがけない貴重な人生を造り出してください。

三年生になって、それぞれ与えられている夢に、願いに向つて、進もうとしています。一年後、その結果を見るでしょう。どのような結果があつても、神様があなたに与えておられる最高のことであることを感謝して受け止めてください。そうなるためにこそ、日々、神様に祈り、力と知恵を与えられて、全力を尽くす一年であつてください。

「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけだから、動かされないようにしっかりと立ち、主の業に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないこと

を、あなたがたは知っているはずです。」(第一コリント十五・五八)

もう一つ、今日、あなたの心に留めていただきたいことがあります。

聖書のマタイによる福音書二二章三九節に「隣人を自分のように愛しなさい」とあります。口語訳聖書によると、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」と訳されています。ここで、注目していただきたいのは、「自分のように」また「自分を愛するように」というところです。隣人を愛するにはまず自分を愛していなければ出来ません。人は誰でも自分を愛していると思っています。あなたは自分を愛していると本当に言うのでしょうか。また、自分を愛するとはどういうことでしょうか。自分の欲望や願望、快樂や我儘を充足させることででしょうか。自分は可哀想で、気の毒なものだと自己憐憫に浸るのでしょうか。自分が誰よりも優れている、あれができる、これができると優越感を持つことでしょうか。あるいは、逆に、自分の境遇を嘆き、学校の成績や友人の厳しい言葉に傷ついて、劣等感の虜となり、うじうじと根暗な気持ちで生活することでしょうか。もし、そのようなことを自分に許しておくことが自分を愛することだとするなら、隣人を

愛することは到底できません。

自分を愛するとはありのままの自分を高く評価すること、自分の存在が掛け替えのない尊い存在であることを認めること、信じることです。このような確信は、人と比べて何か出来るのか、人にはない才能が自分にあるのか、与えられた能力や置かれた境遇から生まれてくるものではありません。あなたが今生きて、存在していること事態が尊いものであるという値打ちはどこからくるのでしょうか。それは、私たちが神様によって造られ、そればかりか、神の像(カタチ)に象って尊く造られたものであり、しかも、神の子キリストを私たちの罪の犠牲として十字架に掛けてくださる程に、神様が私たちを、あなたを限りなく愛してくださっていることを信じる以外にありません。あなたは、両親や兄弟姉妹からばかりでなく、何と神様から愛され、赦され、生かされる大切な存在であります。どうぞそのことをしっかりと心に信じてください。

神様に愛された、高価な存在である自分を信じるとき、人の評価も学校での成績も与えられた進路に関する世間での評判も、また親や家族の言葉も、あなたの価値を決めるものではないことがはつきりしてきます。だからといって、高慢になることもありません。なぜなら、あなたの中にある何かが評

価されて、神様に愛されているわけではなく、あなたを価値ある尊い存在として生かしてくださるのは、神様の一方的なご愛によるからで、あなたには何の誇るところもありません。ただ、神様の恵みを感謝しつつ、大切な自分であることを自覚して、今与えられているなすべき務めを精一杯、悔いのないように果すことが自分を愛しているものではないでしょうか。正しく、しっかりと自分を愛することができるようになりますと、おのずから他者に対しても寛容な心を持つことが出来るようになります。そればかりか、神様に愛されている者として、他者を愛することもできます。

四月からの生活のなかで、迷ったり、落ち込んだり、失望したり、目標を見失ったりと心が大きく揺れ動くことがあるでしょう。しかし、そのようなときこそ、神様の大きなご愛を悟ることができます。愛され、尊い、価値ある自分であることをしっかりと心に信じるとき、どのような困難にも打ち勝つことができます。神様はあなたにとって最高の道を備えていてくださいます。

細かく、具体的にお話できればよかったです。直接お目にかかってお話することが出来ませんので、このような一

文にしたためておきました。どうぞ、高校生活最後の一年が神様の豊かな恵みに満たされて、長い人生の基となりますように全力を尽くしてください。神様の祝福をお祈りしつつ。

(二〇〇一年三月十二日)





2010年 7 月 25 日 戸畑教会



2010年 7 月 25 日
戸畑教会の礼拝





2011年1月1日 福岡大濠公園教会



2011年1月4日 八幡前田教会

編集後記

ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。(ローマ十一・三三)

今年も主の憐れみにより、ぶどうの木第三六号を発行する事が出来た。

編集に当たり、多くの兄弟姉妹の生きた御証しを拝読する時、神様のその御計画の大いになると、またその万遍無さに、只々、感嘆する他ない。

格別今回は、受洗五十年を迎える方々に御寄稿戴いた訳だが、兄弟姉妹の半世紀に亘る信仰生活の中で執行された神様の御計画は、常に完全であつて、一分の隙も無い。これが見えざる手に持ち運ばれているので無くては一体何か、と改めて感じずには居られない。

この書をお読みになる全ての方が、共にこの恵みを味い、また願わくば、御自身の信仰生活において、主がどの様に働いて下さっているか、その御計画の証人として、召し出される事を願って止まない。

最後に、この様な者を編集の御用へと用いて下さった主の心から感謝を。一切の栄光が主に在ります様に。(望)

発行 二〇一一年三月

発行者 福岡市中央区鳥飼二丁目二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社